一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第14集

仁右衛門畑遺跡 Ⅱ

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

下巻

―弥生時代編―

2001

福岡県教育委員会

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第14集

仁右衛門畑遺跡 II

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

下巻

―弥生時代編―

序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和55年度から一般国道210号浮羽バイパスの建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は現在も継続中ですが、浮羽町・吉井町におきましては、部分的な一般供用もおこなわれています。

本書は、平成７年度から９年度にかけて発掘調査を実施した、浮羽郡吉井町所在の仁右衛門畑遺跡の調査記録です。今回の調査では、弥生時代の集落をはじめ、古墳時代の集落、奈良時代の掘立柱建物群を中心とする集落、さらに中世の居館といった数多くの発見があり、先人の足跡を知る貴重な成果を得ることができました。

本書が地域の歴史研究や教育、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたりまして、ご協力いただいた多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成13年３月30日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　言

1．この報告書は、平成7（1995）年度から平成9（1997）年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局（現国土交通省九州地方整備局）の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第14集である。

2．本書に掲載した仁右衛門畑遺跡は、一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第5地点にあたり、浮羽郡吉井町大字新治字仁右衛門畑、今屋敷、灰高に所在する。

3．仁右衛門畑遺跡の報告は、平成11・12（1999・2000）年度の2ケ年に分けて実施する。平成11年度は古墳時代以降編、平成12年度は弥生時代編からなる。

4．本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真はフォト大塚ならびに空中写真企画に委託した。

5．本書に掲載した遺構図は調査担当者の他、飯田澄枝・石橋丸子・丸山喜代子・本石セツ子・星野恵美・山口由美子らの協力を得た。

6．出土遺物の整理・復元作業は岩瀬正信の指導のもと九州歴史資料館で行った。

7．出土土器の実測は吉田の他、宮地聡一郎、野口木綿、平尾和久、平田泰美、棚町陽子、久富美智子、田中典子、坂田順子、鵜江圭子、藤原さとみ、江口孝子、堀之内久美子、若松三枝子、栗林明美、寺岡和子、荒川妙、小西藍の協力を得た。また石器、鉄器等の実測は吉田が行った。

8．鉄斧の分析については東北芸術工科大学芸術学科助手　松井敏也氏に、土器の胎土分析については㈱九州環境管理協会に依頼した。短期間の中で快く受諾していただいた各位に感謝申し上げたい。

9．遺構・遺物の製図は桑福弥生・原カヨ子・江上佳子が行った。

10．本書の執筆はⅣ-2を平尾和久、Ⅴ-1を松井敏也氏、Ⅴ-2を㈱九州環境管理協会が行い、他を吉田が行った。編集は吉田が行った。

本 文 目 次

＜上巻＞

Ⅰ　はじめに……1

　1.　調査の経過……1

　2.　調査の組織……3

Ⅱ　位置と環境……5

　1.　地理的環境……5

　2.　歴史的環境……6

Ⅲ　発掘調査の記録……9

　1.　遺跡の概要……9

　2.　基本層序……9

　3.　検出遺構と遺物（弥生時代）……11

　　竪穴住居跡……11

　　土坑……46

　　甕棺墓……212

　　溝……213

　　ピット出土土器……224

　　包含層その他出土土器・磁器……236

　　縄文土器……240

　　その他の遺物……242

＜下巻＞

Ⅳ　おわりに……263

　1.　仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期土器について……263

　2.　浮羽郡内における弥生時代後期の土器について……272

　3.　弥生時代の遺構について……278

Ⅴ　自然科学系の分析……281

　1.　仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代鉄器……281

　2.　仁右衛門畑遺跡出土土器の胎土分析……286

図 版 目 次

巻頭図版　仁右衛門畑遺跡周辺航空写真
図版１　1.　調査区中央全景（空中写真　南東から）
　　2.　調査区中央北側全景（空中写真　南東から）
図版２　1.　調査区南東全景（空中写真　上空から）
　　2.　調査区南東端　第二遺構面全景（東から）
図版３　1.　５竪穴住居跡（東から）
　　2.　５・６・10号竪穴住居跡（東から）
　　3.　６号竪穴住居跡（南から）
図版４　1.　11号竪穴住居跡（南から）
　　2.　11号竪穴住居跡　遺物出土状態（北から）
　　3.　18号竪穴住居跡（東から）
図版５　1.　20号竪穴住居跡（西から）
　　2.　26号竪穴住居跡（北から）
　　3.　27号竪穴住居跡（北から）
図版６　1.　53・54号竪穴住居跡（北から）
　　2.　55・56号竪穴住居跡（東から）
　　3.　56号竪穴住居跡（東から）
図版７　1.　60号竪穴住居跡（南から）
　　2.　調査区中央北側　遺構確認状態（東から）
　　3.　同　完掘状態（東から）
図版８　1.　61号竪穴住居跡（南から）
　　2.　62・63号竪穴住居跡（西から）
　　3.　64号竪穴住居跡（西から）
図版９　1.　66号竪穴住居跡（南から）
　　2.　67号竪穴住居跡（南から）
　　3.　68号竪穴住居跡（南から）
図版10　1.　１号土坑（北から）
　　2.　２号土坑（東から）
　　3.　11号土坑（北から）
図版11　1.　12号土坑（西から）
　　2.　13号土坑（北から）
　　3.　17号土坑（東から）
図版12　1.　18・19号土坑（東から）
　　2.　20号土坑遺物出土状態（西から）
　　3.　20号土坑（西から）
図版13　1.　21号土坑（東から）

2. 22号土坑（南から）
3. 23号土坑（西から）

図版14 1. 24号土坑（南から）
2. 26号土坑（南から）
3. 27号土坑（東から）

図版15 1. 28号土坑（北から）
2. 29号土坑（西から）
3. 30号土坑（南から）

図版16 1. 31・34・46号土坑（西から）
2. 31・46号土坑（北から）
3. 34号土坑（北から）

図版17 1. 35号土坑（東から）
2. 37号土坑（北から）
3. 38号土坑（東から）

図版18 1. 41号土坑（南から）
2. 43号土坑遺物出土状態（南から）
3. 43号土坑（南から）

図版19 1. 44号土坑（南から）
2. 45号土坑（北から）
3. 51号土坑（西から）

図版20 1. 52号土坑（東から）
2. 53号土坑（南から）
3. 55号土坑（南から）

図版21 1. 56号土坑遺物出土状態（南から）
2. 56号土坑（南から）
3. 58号土坑（南から）

図版22 1. 60号土坑（北から）
2. 61号土坑（北から）
3. 62号土坑（北から）

図版23 1. 64号土坑（北から）
2. 65号土坑（北から）
3. 66号土坑（北から）

図版24 1. 68号土坑（南から）
2. 69・70号土坑（西から）
3. 72号土坑（西から）

図版25 1. 74号土坑（北から）
2. 76・77号土坑（西から）
3. 78号土坑（東から）

図版26　1.　79号土坑（東から）
　　2.　80号土坑（東から）
　　3.　80号土坑（西から）
図版27　1.　81号土坑（北から）
　　2.　82号土坑（東から）
　　3.　85号土坑（南から）
図版28　1.　86号土坑（東から）
　　2.　87号土坑（南から）
　　3.　88号土坑（東から）
図版29　1.　92号土坑（南から）
　　2.　93号土坑（南から）
　　3.　96号土坑（北から）
図版30　1.　97号土坑（東から）
　　2.　99号土坑（北から）
　　3.　100号土坑（南から）
図版31　1.　102号土坑（東から）
　　2.　103号土坑土層（西から）
　　3.　103号土坑（北から）
図版32　1.　104号土坑（北から）
　　2.　105号土坑（西から）
　　3.　106号土坑（南から）
図版33　1.　107号土坑（東から）
　　2.　108号土坑（南から）
　　3.　109号土坑（東から）
図版34　1.　110号土坑（西から）
　　2.　67・68号竪穴住居跡、111・112号土坑（南西から）
　　3.　112号土坑（北から）
図版35　1.　113号土坑（西から）
　　2.　116号土坑（東から）
　　3.　117・118・124号土坑（北から）
図版36　1.　119号土坑（東から）
　　2.　121号土坑（東から）
　　3.　73号竪穴住居跡、122号土坑（南から）
図版37　1.　123号土坑（西から）
　　2.　125号土坑（西から）
　　3.　126号土坑（南から）
図版38　1.　128号土坑（北から）
　　2.　129号土坑（西から）

3. 130号土坑（北から）
図版39 1. 132号土坑（南から）
2. 133号土坑（南から）
3. 134号土坑（西から）
図版40 1. 1号甕棺墓（東から）
2. 25号溝断面土層（北から）
3. P-169（西から）
図版41 11号竪穴住居跡出土土器
図版42 18・20・26号竪穴住居跡出土土器
図版43 26・27号竪穴住居跡出土土器
図版44 27・56・60号竪穴住居跡出土土器
図版45 1・2・8・11・19・20号土坑出土土器
図版46 20・30号土坑出土土器
図版47 30・31号土坑出土土器
図版48 34号土坑出土土器①
図版49 34号土坑出土土器②
図版50 34・35・42・43号土坑出土土器
図版51 43号土坑出土土器
図版52 43～45号土坑出土土器
図版53 45・52・53・55・56号土坑出土土器
図版54 56～58号土坑出土土器
図版55 58・59・61・68号土坑出土土器
図版56 68～70・72号土坑出土土器
図版57 74・76・78～80号土坑出土土器
図版58 80～82・85～87号土坑出土土器
図版59 87・88・92号土坑出土土器
図版60 92・93・96・97・100号土坑出土土器
図版61 100号土坑出土土器
図版62 100・102・103号土坑出土土器
図版63 103・105・107・109・110・121号土坑出土土器
図版64 125～127号土坑出土土器
図版65 128～130・133号土坑出土土器
図版66 12号溝出土土器
図版67 12・25・42号溝出土土器
図版68 42号溝、1号甕棺墓出土土器
図版69 ピット出土土器①
図版70 ピット出土土器②
図版71 ピット、その他出土土器

図版72　1.　縄文土器①
　　2.　縄文土器②
図版73　1.　土錘①
　　2.　土錘②
　　3.　投弾、土製紡錘車
図版74　1.　石製紡錘車、浮子、円盤状石製品
　　2.　砥石①
図版75　1.　砥石②
　　2.　砥石③
　　3.　砥石④
図版76　1.　砥石⑤
　　2.　砥石⑥
図版77　1.　凹石、敲石
　　2.　石皿
図版78　1.　石錘、不明石製品
　　2.　滑石製品
　　3.　初期須恵器
図版79　1.　打製石鏃①
　　2.　打製石鏃②
　　3.　打製石鏃③
図版80　1.　スクレイパー①
　　2.　スクレイパー②
図版81　1.　メノウ製スクレイパー、石核
　　2.　使用痕ある剥片
　　3.　打製石斧①
図版82　1.　打製石斧②
　　2.　磨製石鏃、磨製石剣
　　3.　磨製石剣
図版83　1.　片刃石斧①
　　2.　片刃石斧②
　　3.　磨製石斧①
図版84　1.　磨製石斧②
　　2.　石包丁①
　　3.　石包丁②
図版85　1.　石包丁③
　　2.　石包丁未製品
図版86　1.　鉄斧①
　　2.　鉄斧②

3. 鉄斧③
図版87 1. 鉄器①
2. 鉄器②
3. 鉄滓
図版88 1. 銅製品、ガラス製小玉
2. 古銭

挿 図 目 次

第1図 吉井町位置図……5
第2図 周辺遺跡分布図（1／25,000）……7
第3図 調査区位置図（1／2,000）……10
第4図 基本土層図（1／40）……11
第5図 5・9号竪穴住居跡実測図（1／60）……12
第6図 5・6号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……13
第7図 6・7号竪穴住居跡実測図（1／60）……14
第8図 11号竪穴住居跡実測図（1／60）……16
第9図 11号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……17
第10図 18・20号竪穴住居跡実測図（1／60）……19
第11図 18・20号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……20
第12図 26・27号竪穴住居跡実測図（1／60）……22
第13図 26号竪穴住居跡出土土器実測図①（1／4）……23
第14図 26号竪穴住居跡出土土器実測図②（1／4）……24
第15図 27号竪穴住居跡出土土器実測図①（1／4）……26
第16図 27号竪穴住居跡出土土器実測図②（1／4）……28
第17図 27号竪穴住居跡出土土器実測図③（1／4）……29
第18図 53・54号竪穴住居跡実測図（1／60）……31
第19図 53～56号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……32
第20図 55号竪穴住居跡実測図（1／60）……34
第21図 56号竪穴住居跡実測図（1／60）……35
第22図 60・61号竪穴住居跡実測図（1／60）……37
第23図 60～62号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……38
第24図 62～64号竪穴住居跡実測図（1／60）……39
第25図 66号竪穴住居跡実測図（1／60）……41
第26図 64・66～68・79号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……42
第27図 67号竪穴住居跡実測図（1／60）……43
第28図 68号竪穴住居跡実測図（1／60）……44
第29図 73号竪穴住居跡実測図（1／60）……45
第30図 79号竪穴住居跡実測図（1／60）……46

第31図　1・2・8・11号土坑実測図（1／30、1／40）……47
第32図　1・2・8号土坑出土土器実測図（1／4）……48
第33図　11号土坑出土土器実測図（1／4）……51
第34図　12・13・17～19・21号土坑実測図（1／30）……53
第35図　12・13・17号土坑出土土器実測図（1／4）……54
第36図　18・19号土坑出土土器実測図（1／4）……57
第37図　20・22・23号土坑実測図（1／40）……59
第38図　20号土坑出土土器実測図①（1／4）……60
第39図　20号土坑出土土器実測図②（1／4）……61
第40図　21～23・24・26・27号土坑出土土器実測図（1／4）……63
第41図　24・26～29号土坑実測図（1／40）……64
第42図　28・29号土坑出土土器実測図（1／4）……66
第43図　30・31・46号土坑実測図（1／40）……68
第44図　30号土坑出土土器実測図①（1／4）……69
第45図　30号土坑出土土器実測図②（1／4）……70
第46図　31号土坑出土土器実測図①（1／4）……72
第47図　31号土坑出土土器実測図②（1／4）……73
第48図　32号土坑出土土器実測図（1／4）……75
第49図　32・34号土坑実測図（1／30、1／40）……76
第50図　34号土坑出土土器実測図①（1／4）……78
第51図　34号土坑出土土器実測図②（1／4）……79
第52図　34号土坑出土土器実測図③（1／4）……81
第53図　34号土坑出土土器実測図④（1／4）……82
第54図　34号土坑出土土器実測図⑤（1／6、1／4）……84
第55図　34号土坑出土土器実測図⑥（1／4）……86
第56図　35・40・41号土坑実測図（1／40）……87
第57図　35・40・41号土坑出土土器実測図（1／4）……88
第58図　42～44号土坑実測図（1／40）……91
第59図　42号土坑出土土器実測図（1／4）……92
第60図　43号土坑出土土器実測図①（1／4）……94
第61図　43号土坑出土土器実測図②（1／4）……96
第62図　43号土坑出土土器実測図③（1／4）……98
第63図　43号土坑出土土器実測図④（1／4）……99
第64図　43号土坑出土土器実測図⑤（1／6、1／4）……100
第65図　44号土坑出土土器実測図（1／4）……102
第66図　45・47号土坑実測図（1／40）……105
第67図　45～48号土坑出土土器実測図（1／4）……106
第68図　48・51～53・55号土坑実測図（1／40）……108

第69図　51号土坑出土土器実測図（1／4）……109
第70図　52・53号土坑出土土器実測図（1／4）……111
第71図　55号土坑出土土器実測図①（1／4）……113
第72図　55号土坑出土土器実測図②（1／4）……114
第73図　56～58号土坑実測図（1／40）……115
第74図　56号土坑出土土器実測図①（1／4）……117
第75図　56号土坑出土土器実測図②（1／4）……118
第76図　57号土坑出土土器実測図（1／4）……119
第77図　58号土坑出土土器実測図（1／4）……120
第78図　59～62号土坑実測図（1／40）……122
第79図　59・60号土坑出土土器実測図（1／4）……123
第80図　61号土坑出土土器実測図①（1／4）……125
第81図　61号土坑出土土器実測図②（1／4）……126
第82図　64～66号土坑実測図（1／40）……128
第83図　64・65号土坑出土土器実測図（1／4）……129
第84図　68・69号土坑実測図（1／40）……130
第85図　68号土坑出土土器実測図①（1／4）……132
第86図　68号土坑出土土器実測図②（1／4）……133
第87図　68号土坑出土土器実測図③（1／4）……135
第88図　69・70号土坑出土土器実測図（1／4）……136
第89図　70・72・74・76号土坑実測図（1／40）……138
第90図　72号土坑出土土器実測図①（1／4）……140
第91図　72号土坑出土土器実測図②（1／4）……141
第92図　74・76・77号土坑出土土器実測図（1／4）……142
第93図　77・78号土坑実測図（1／40）……144
第94図　78号土坑出土土器実測図（1／4）……145
第95図　79～81号土坑実測図（1／40）……147
第96図　79・80号土坑出土土器実測図（1／4）……148
第97図　81号土坑出土土器実測図（1／4）……151
第98図　82・85号土坑実測図（1／40）……152
第99図　82号土坑出土土器実測図（1／4）……153
第100図　85号土坑出土土器実測図（1／4）……154
第101図　86～88号土坑実測図（1／40）……156
第102図　86号土坑出土土器実測図（1／4）……157
第103図　87号土坑出土土器実測図①（1／4）……158
第104図　87号土坑出土土器実測図②（1／4）……159
第105図　88号土坑出土土器実測図（1／4）……161
第106図　92・93号土坑実測図（1／40）……163

第107図 92号土坑出土土器実測図①（1／4）……164
第108図 92号土坑出土土器実測図②（1／4）……165
第109図 93・94号土坑出土土器実測図（1／4）……167
第110図 94～96号土坑実測図（1／40）……168
第111図 95・96号土坑出土土器実測図（1／4）……169
第112図 97・99・100号土坑実測図（1／40）……171
第113図 97号土坑出土土器実測図①（1／4）……172
第114図 97号土坑出土土器実測図②（1／4）……173
第115図 100号土坑出土土器実測図①（1／4）……176
第116図 100号土坑出土土器実測図②（1／4）……177
第117図 101・102号土坑実測図（1／40）……180
第118図 102号土坑出土土器実測図（1／4）……181
第119図 103・104号土坑実測図（1／40）……183
第120図 103号土坑出土土器実測図（1／4）……184
第121図 104～106号土坑出土土器実測図（1／4）……186
第122図 105～107号土坑実測図（1／40）……187
第123図 107・109・110号土坑出土土器実測図（1／4）……189
第124図 108～110号土坑実測図（1／40）……190
第125図 112・113号土坑実測図（1／40）……192
第126図 112・113・116・118～122号土坑出土土器実測図（1／4）……194
第127図 114～118号土坑実測図（1／40）……195
第128図 119～121号土坑実測図（1／40）……197
第129図 122～124号土坑実測図（1／40）……199
第130図 123・125号土坑出土土器実測図（1／4）……200
第131図 125～127号土坑実測図（1／40）……202
第132図 126・127号土坑出土土器実測図（1／4）……203
第133図 128・129号土坑実測図（1／40）……206
第134図 128号土坑出土土器実測図①（1／4）……207
第135図 128号土坑出土土器実測図②（1／4）……208
第136図 129・130・132～134号土坑出土土器実測図（1／4）……209
第137図 132～134号土坑実測図（1／40）……210
第138図 1号甕棺墓実測図（1／10）……212
第139図 1号甕棺実測図（1／4）……213
第140図 溝断面実測図（1／20、1／30）……214
第141図 9・12号溝出土土器実測図（1／4）……215
第142図 12号溝出土土器実測図（1／4）……216
第143図 20・21号溝出土土器実測図（1／4）……218
第144図 25・26号溝出土土器実測図（1／4）……221

第145図 42号溝出土土器実測図（1／4）……223
第146図 ピット出土土器実測図①（1／4）……225
第147図 ピット出土土器実測図②（1／4）……226
第148図 ピット出土土器実測図③（1／4）……227
第149図 ピット出土土器実測図④（1／3）……228
第150図 ピット出土土器実測図⑤（1／3）……230
第151図 ピット出土土器実測図⑥（1／3）……233
第152図 ピット出土陶磁器実測図（1／3）……235
第153図 包含層その他出土土器実測図（1／4、1／3）……237
第154図 包含層その他出土土器・磁器実測図（1／3）……238
第155図 縄文土器実測図（1／3）……241
第156図 土製品・石製品実測図（1／2）……243
第157図 石製品実測図①（1／3）……244
第158図 石製品実測図②（1／3、1／4）……245
第159図 石製品実測図③（1／3、1／4）……246
第160図 石製品実測図④（1／3）……247
第161図 石器実測図①（2／3）……249
第162図 石器実測図②（1／2）……250
第163図 石器実測図③（1／3）……251
第164図 石器実測図④（1／2）……253
第165図 石器実測図⑤（1／2）……254
第166図 石器実測図⑥（1／3）……255
第167図 石器実測図⑦（1／2）……256
第168図 石器実測図⑧（1／2）……257
第169図 金属器等実測図（1／2、1／1）……258
第170図 仁右衛門畑遺跡出土弥生時代中期土器編年図（1／10）……265
第171図 浮羽郡の弥生時代後期土器編年図①（1／8）……274
第172図 浮羽郡の弥生時代後期土器編年図②（1／8・1／16）……275
第173図 仁右衛門畑遺跡弥生時代主要遺構変遷図（1／600）……279
付 図 仁右衛門畑遺跡遺構配置図（1／200）

表 目 次

第1表 浮羽バイパス各調査地点一覧……2
第2表 土製品・石製品・金属製品一覧表①……260
第3表 土製品・石製品・金属製品一覧表②……261
第4表 土製品・石製品・金属製品一覧表③……262
第5表 仁右衛門畑遺跡出土甕分類表①……268
第6表 仁右衛門畑遺跡出土甕分類表②……269

Ⅳ　おわりに

1. 仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期土器について

これまで浮羽郡内においては、弥生時代中期初頭～前半の良好な出土遺物が皆無に等しく、その様相に不明な点を多く抱えたままであった。今回仁右衛門畑遺跡で当該期の良好な一括出土土器に恵まれ、遺跡内での編年序列の組み立て、或いは他集落の出土土器との比較検討が可能となったので、以下でこれを行うこととしたい。

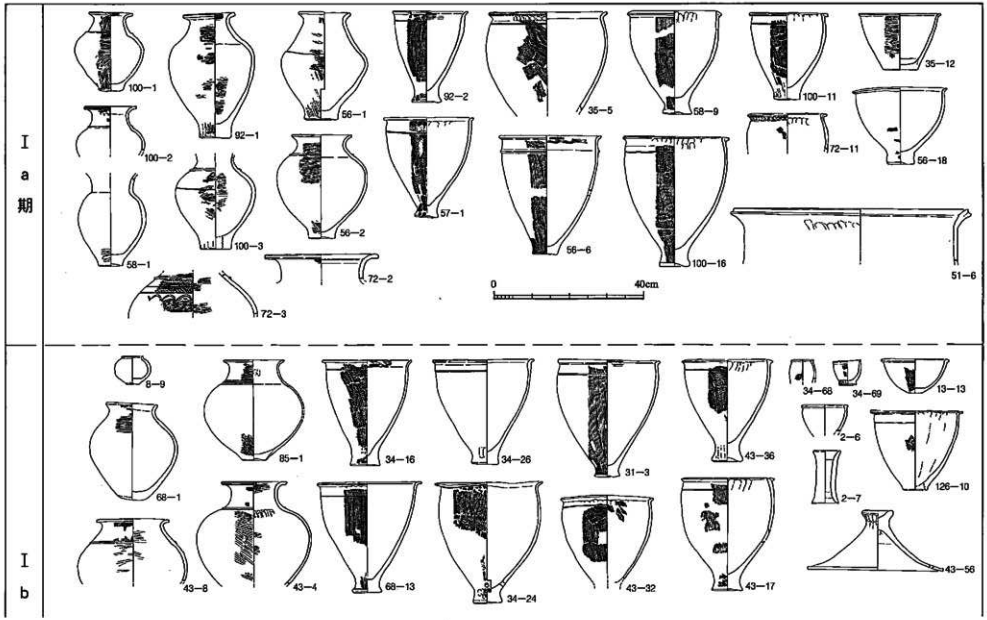
土器編年を行うにあたっては、良好な一括資料である土坑出土土器群を取り扱い、基本的に共存資料での抽出を行った。土坑出土資料には複数回の廃棄行為を行っている場合も認められるが、土坑の埋没過程においてそれほど長年に及んだとは思えず、極めて短い期間内での廃棄行為が想定され、時間差はないものと考えている。ゆえに明らかな混入品を除いて一括資料に複数型式を含んでいる場合もその一括性を尊重している。

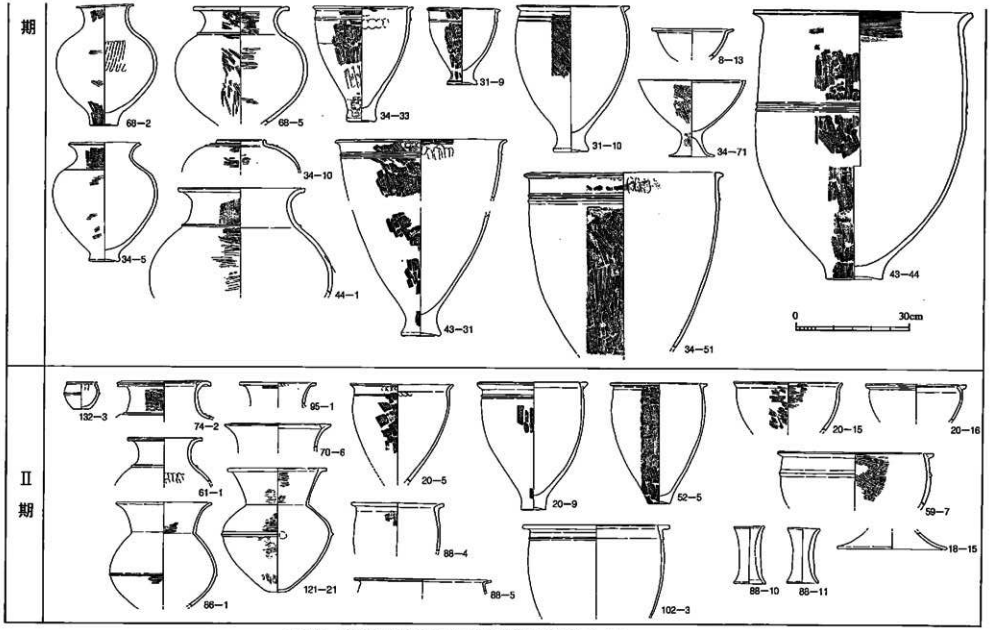
Ⅰa期　この時期の一括資料には、35号・51号・56号～58号・72号・92号・100号土坑出土土器がある。次のⅠb期とともに大きく中期初頭に位置付けられる一群だが、一括資料の中に前段階である前期末的な特徴が認められるものであり、時期的に若干先行すると思われる事からⅠb期と分離したものである。従ってⅠb期と共通する器形が多く含まれ、明確に分離できた訳ではない。

壺は頸肩境に明瞭な段を有し、頸部が直線的に内傾する100号土坑の１（以下100-1と呼ぶ）、長胴でやはり直線的に内傾する頸部を持つ92-1、頸肩境に沈線を巡らせ、頸部が直線的に内傾する56-1がある。これらは単体では前期に位置付けられるものの、例えば100-1の共伴資料を見れば100-2や100-3の壺のように頸肩境に三角突帯を巡らせるものや、100-16の三角口縁の甕のように次のⅠb期と全く変わらないものである。しかし出土状態からは混入を想定することは出来ない。従って中期初頭の段階にまで前期的様相が残ったものと解釈すべきであろう。100-3は長胴で底部が厚く、92-1と良く似ているが先述の三角突帯を巡らせる点で92-1よりも型式的に後出する。また58-1もやはり底部が厚く長胴気味だが底部が柱状にならない点や外反する頸部に型式的に後出する要素を見出せる。72-3は肩部に文様帯を巡らせており前期末的だが他の共伴遺物は全て中期初頭としてよいものである。この共伴遺物には72-2のように内面に蓋受けの突帯を巡らせる大型壺や72-11の異形の甕がある。この土器に関しては朝鮮系無文土器の影響を考えても良いかもしれない。

甕は92-1と共伴した92-2の如意形口縁の甕がある。胴部はあまり開かず直線的に伸び、口縁部の外反が緩く、古式の特徴を示している。他に35-5の甕のように口縁部下端に刻目を施したものもあるが、これは胴部が丸く張っており後出の要素をも合わせ持つ。甕は如意形口縁・三角口縁の甕ともに胴部上方が直立する傾向にあるようである。56-6は底部があまり厚くならず、古式の特徴を留めている。

その他の遺物に鉢、大型甕がある。35-12は厚くならない平底で胴部はあまり湾曲せずに開き、口縁部は短く外反している。56-18は底部が非常に厚く甕の底部と似る。51-6は通常甕棺に使用される器形である。


Ⅰa期
100−1
92−1
56−1
92−2
35−5
58−9
100−11
35−12
100−2
72−11
56−18
58−1
100−3
56−2
57−1
56−6
100−16
51−6
72−2
72−3
0
40cm
Ⅰb
8−9
68−1
85−1
34−16
34−26
31−3
43−36
34−68
34−69
13−13
2−6
126−10
2−7
43−56
43−8
43−4
68−13
34−24
43−32
43−17



第170図　仁右衛門畑遺跡出土弥生時代中期土器編年図（1／10）

Ⅰb期　この時期の良好な一括資料には34号・43号・68号土坑がある。これ以外にも資料が豊富であり、足りない器形はその他の土坑で補っている。典型的な中期初頭の土器群である。

壺には小形・中形・大形がある。8-9は次のⅡ期に継続する器形の無頸壺だが、Ⅱ期のものと比べて底部が厚く頸部が締まり、胴部に三角突帯を持たない。中形壺は68-1のように底部が丸く不安定なもの、68-1・43-8のように頸部が短いもの、34-5のように口縁端部を幅広く窪ませたもの、34-10のような異形のものなどバラエティに富むが、基本的に胴部が丸く張り、胴部最大径が上位にあり、頸部は前期と比べて立ち上がる傾向にあるものの未だ内傾しており、口縁部は丸く外反している。大半のものは頸肩境に三角突帯を巡らす。大形壺も中形と大差ない。

甕は如意形口縁の甕、三角口縁の甕ともに一定量存在し、どちらかを客体に位置付ける事はできない。中には31-3や43-32のように折衷形態のような甕もある。口縁部の形態以外に異なる点として、三角口縁の甕の方が如意形の甕と比べて器高の割に口径が大きくなる傾向にあるが、一概には言えないようである。どちらも底部は高く柱状をなし、裾が開く。胴部は上半が直立あるいは内傾するが、内傾するものは次のⅡ期へと継続する特徴であり後出する要素である。大半のものが外面の口縁部下に一条の沈線を巡らせているが、中には34-33のように三角突帯を巡らせるものや31-10のやや大形の甕のように二条の沈線を巡らせるもの、34-24のように何も巡らさないものがあるが、量的に少ない。また小形甕31-9や大形甕43-31、34-51には三角突帯を巡らせている。特に大形の甕には沈線ではなく三角突帯を巡らせる傾向にある点は重要である。

鉢には34-68・34-69・2-6の小形鉢、三角口縁の13-13や強く屈曲する如意形口縁系の126-10のような中形鉢がある。器台は2-7のように上下の開き方が同じものがこの頃に出現するが、数は少ない。蓋は端部が大きく開き、天井部が甕の底部と良く似た形状のものである。高坏は8-13のように如意形口縁から発展して強く屈曲する口縁のものがある。34-71は高坏と呼ぶには脚部が低すぎることから台付鉢と報告したものである。口縁部内面が短く内側に突出しており次のⅡ期に発展する要素を持っている。43-44は通常甕棺に使用する大形甕である。他の土器群と共伴する資料であり併行関係を求める上で興味深い。

Ⅱ期　この時期の一括資料には20号・74号・88号土坑等があるが、あまり条件の良い一括資料とは言えない。また20号土坑出土土器のように前段階の特徴を持ち、他と比べて若干先行する可能性のある土器群もあるものの、壺等において明瞭なセット関係を保有していなかった為に分離を断念した一群もある。将来の良好な一括資料に期待したい。

壺には小形・中形・大形がある。132-3はⅠb期の8-9と比べて底部が薄く口縁部が開き、また胴部に一条の三角突帯を巡らせている。中形壺には素口縁のものと、未発達な鋤先口縁のものとがある。鋤先口縁の壺については97-1のようにⅠb期に遡る可能性もあるが、共伴遺物に恵まれない為に判断は差し控えた。今後の資料の増加に期待したい。

素口縁の壺は74-2のようにわずかに内傾するもの、61-1のようにわずかに外反するもの、86-1のように口縁部が大きく開くものがありⅠ期からの連続する変化が追える。鋤先口縁の壺は全て口縁部が開くが、端部の形状で95-1のように端部が肥厚するものから70-6のように内端が突出するものを経て121-21のように端部が鋤先状に伸びるものへと発展段階が認められるが、共伴する土器から見ると全てⅡ期におさまるものである。

甕はやはり如意形口縁の系統を引く甕と三角口縁の系統を引く甕とがある。先述したように20-9には厚い底部や三角形状の口縁部にⅠb期の要素が色濃く窺え、また共伴する20-5の如意形口縁の甕はⅠb期のものと変わらない。これらは他のものと比較すると型式的にやや先行するものである。

如意形口縁の甕の系統のものは88-4のように内面に明瞭な稜をもつものや、88-5のように強く屈曲したものがある。三角口縁の甕の系統のものは52-5や102-3のように逆L字状に伸びた口縁となる。52-5の底部は既に薄くなりつつあり、胴部上半は内傾する。外面の口縁部下には沈線を巡らさずに三角突帯を巡らすか、あるいは何も巡らさないものが多く、Ⅰb期と大きく異なる。如意形口縁の系統を引く甕と逆L字口縁の甕とでは圧倒的に逆L字口縁の甕の方が多い。これもⅠb期と異なる点である。

鉢には如意形口縁の20-15、短い逆L字状口縁の20-16、逆L字状口縁で口縁部下に三角突帯を巡らす59-7があるが、このうち前二者は甕と同様Ⅰb期の様相を色濃く残すものである。器台はⅠb期と器形の変化は認められないが、出土量が増加する。壺もⅠb期と器形の変化はない。

甕の口縁部形態による分類　次に仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期の甕について、口縁部形態による分類を行いたいと思う。以下に採る方法は、かつて中間研志氏によって筑紫野市剣塚遺跡、甘木市西原C遺跡、朝倉町金場遺跡において行われたものであるが、地域的・時期的傾向を追い求める上では有効な手段と思われ、比較検討するためにも同様の分類を援用した。分類基準は以下に示すとおりである。なお、Ⅰ・Ⅱ類は弥生時代中期初頭、Ⅲ・Ⅳ類は弥生時代中期前半におおよそ位置付けられるものである。

Ⅰ-A類：如意形口縁で口縁部下端に刻目を施すもの。

Ⅰ-B類：如意形口縁で口縁端部の刻目、胴部の突帯・沈線等を全くもたないもの。

Ⅰ-C類：如意形口縁で口縁部下に沈線を巡らすもの。

Ⅰ-D類：如意形口縁で口縁部下に三角突帯を巡らすもの。

Ⅱ-A類：三角口縁で口縁端部に刻目を施すもの。

Ⅱ-B類：三角口縁で胴部の突帯・沈線等を全くもたないもの。

Ⅱ-C類：三角口縁で口縁部下に沈線を巡らすもの。

Ⅱ-D類：三角口縁で口縁部下に三角突帯を巡らすもの。

Ⅲ-B類：如意形口縁から変化した屈折口縁で突帯・沈線等を全くもたないもの。

Ⅲ-C類：如意形口縁から変化した屈折口縁で口縁部下に沈線を巡らすもの。

Ⅲ-D類：如意形口縁から変化した屈折口縁で口縁部下に三角突帯を巡らすもの。

Ⅳ-B類：三角口縁から変化した逆L字状口縁で突帯・沈線等を全くもたないもの。

Ⅳ-C類：三角口縁から変化した逆L字状口縁で口縁部下に沈線を巡らすもの。

Ⅳ-D類：三角口縁から変化した逆L字状口縁で口縁部下に三角突帯を巡らすもの。

第５・６表から得られた事は、まずⅠ類とした如意形口縁の甕は沈線を巡らすC類が多く、次いで突帯・沈線を巡らさないB類となり、三角突帯を巡らすD類は一割にも満たない。従って沈線を巡らせるものが一般的であったと言える。Ⅱ類とした三角口縁の甕はB類が約半数を占め、次いでC類が41％とかなり高い割合を占める。D類はⅠ類同様１割程度である。もっともB類に関しては

第5表　仁右衛門畑遺跡出土甕分類表①

	Ⅰ類				Ⅱ類				Ⅲ類			Ⅳ類		
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C
住居														
住5							1					3		1
住6						1	1				1			1
住53										1		3		
住54						2	1	1	1					
住55			2									8		
住56		2	1						1					
住60									3			2		
住61						1			1					
住62						2			3					
住64			1			1			2					
住66												2		
住67									1			4		
住68							1					3		
住79		1								1				
土坑														
土1			1						1					
土2		1				1								
土8						1								
土11		1	2			4	3							
土12			1			1						4		1
土13							1							
土17		2	2			1								
土18											1	6		1
土19		1										1		
土20			4				1					1	1	1
土21		1				1	1							
土22												2		
土23				1		1						1		
土26				1										
土27												1		
土28						2		1						
土29						1						2		1
土30		1	7			2	6							
土31			7				2	3						
土32			2					2						
土34		1	15	4		5	9	3						
土35	1	2	2			2	2							
土40		1										1		
土42		5				1	1							
土43			8	6		1	8	3						
土44			2			1								
土45			4					2						
土46		1	1											
土47							1		1			2		1
土48	1	1	1			1								
土51			1	1										
土52						1						3		
土53				2										
土55			3	1		1	6							
土56			2	3			2	1						
土57			1				1							
土58			3			3	2							
土59						1				1		2		1
土60						3	1							
土61									1	1		5		3
土64		1				1								
土65			1											
土68		4	7	1		2		2						

第6表　仁右衛門畑遺跡出土甕分類表②

	Ⅰ類				Ⅱ類				Ⅲ類			Ⅳ類		
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C
土69			1											
土70												4		
土72			5			3	2							
土74			1									4		
土76				1						1				
土77			1											
土78		1	1			1						5		
土79		3	1			1	2							
土80			2			2	1							
土81									2			7		
土82												4	1	
土85		2	5	1										
土86									1			1		
土87		1	7			1			1		1	4		
土88									2					
土92		2	5			1	3		1					
土93		1	6			1								
土94		1												
土95									1			4		
土96													1	1
土97			7	1		3	4							
土100		2	5			2	3	1						
土102						2								1
土103		1	3									5		
土104		2	1											
土105			1			4	2							
土106		1				3								
土107												1		
土109		1	2											
土110												7	1	1
土112		1				2								
土113			1			1								
土116		1				3								
土118			1			2								
土119			1			1								
土120				1								2		
土122														
土123		1	1	1										
土125	1	1	3			1								
土126		2	1			2								
土127		1	1			2								
土128		2	1	2		3	3							
土132						2						1		
土133		1	1											
溝														
溝9							1							
溝12		2	7				2							
溝20							2							
溝21			1				1		1			7		1
溝25		1	1			2								
溝26		1												
その他		2	1			6	4	1			1	8		1
計	3	60	156	27	0	96	81	20	24	4	4	120	4	16
	1.2%	24%	63%	11%	0 %	49%	71%	10%	72%	15%	12%	86%	3 %	11%
	246				197				33			140		
	56%				44%				19%			81%		
	443								173					

口縁部の細片のみで胴部を欠失したものも少なからず含んでおり、本来はかなり少なかったものと思われる。いずれにせよ、Ⅰ・Ⅱ類ともに沈線を巡らす割合が高く、対して三角突帯は少なかったと言える。

Ⅰ類とⅡ類の比率に関しては、Ⅰ類が56%、Ⅱ類が44%でほぼ同数であり、如意形口縁分布圏と三角口縁分布圏の中間に位置する当地域の地域色をよく示しているものと思う。

次にⅢ類とⅣ類を比較してみると、Ⅲ類・Ⅳ類ともに沈線・三角突帯を持たないB類が多く、沈線のC類、三角突帯のD類が極めて低い。これにもやはり胴部を欠失する口縁部細片の資料を含むために実際はもっとB類の数値が低くなると思われるが、それでもB類の増加と、対するC・D類の減少は傾向として認められるだろう。更にⅢ類とⅣ類の比率を比較してみると、Ⅲ類が約2割、Ⅳ類が約8割でⅣ類が圧倒的に比率が高く、この点でもⅠ・Ⅱ類と大きく異なっており興味深い。

上記の検討を基に、周辺遺跡との比較を行い当遺跡出土土器の特徴を述べておく。

まず、仁右衛門畑遺跡と同じ吉井町内にある大碇遺跡では弥生時代前期後半～中期初頭の土器が出土しており、調査担当者によって遺構別の変遷が検討されている。この中でⅤ期とされた土器群については弥生時代中期初頭の特徴をよく示しており、仁右衛門畑遺跡のⅠb期とした土器群と併行する。Ⅳ期とされた土器群については、壺の形態や甕の胴部から口縁部にかけての形態、口縁部に刻目を施さない点で中期初頭でも古い段階に位置付けられると判断でき、この点では仁右衛門畑遺跡のⅠa期に併行するものと考えられる。だがその一方で、如意形口縁のみで構成され、甕の胴部に三角突帯を巡らせるものが多く、底部があまり厚くならない点で仁右衛門畑遺跡例と異なり、同一地域内におけるこの差異を果たして時期差とみるのか、或いは集落間の差と見るのかは今後の課題である。

続いてやはり同町内にある鷹取五反田遺跡では、弥生時代中期後半の土器がまとまって出土している。甕の口縁部形態を見てみると、亀ノ甲系の三角口縁の系統と言われる鋤先状口縁や端部を丸くおさめる逆L字状口縁の甕とともに、遠賀川以東の如意形口縁の系統と言われる端部を四角く面取りし、上端を跳ね上げる、く字状口縁の甕が少なからず出土しており、当遺跡のⅡ期の様相と大きく異なる。これを果たして時期的な特徴として良いのかどうか、今後の調査の進展に期待したい。

次に、筑後川を挟んで対岸に位置する朝倉郡域の遺跡と比較を行う。

朝倉町にある上の原遺跡では、弥生時代前期末～中期中葉の良好な一括資料が得られており、これを基に土器の変遷が提示されている。仁右衛門畑遺跡と比較して、壺や甕の形態、土器組成の点から仁右衛門畑遺跡のⅠa・Ⅰb期が上の原遺跡のⅡ期、仁右衛門畑遺跡のⅡ期が上の原遺跡のⅢ期にほぼ対応する。しかし細部を見ると、壺において頸部が直立するタイプは仁右衛門畑遺跡では個体数が多くはなく、仁右衛門畑遺跡では頸部が内傾する前期の特徴を残す壺が後々まで残存し、中期初頭では主体的な位置にある。上の原遺跡で見られる広口の小形壺は仁右衛門畑遺跡では出土していない。甕においては上の原遺跡のⅡ期に見られる口縁部とその下の三角突帯に刻目を施す前期的な甕は仁右衛門畑遺跡では全く出土していない。

上の原遺跡と同じ朝倉町にある金場遺跡でもやはり弥生時代中期初頭の良好な一括出土土器があり、先述したとおり甕の口縁部形態について分類がなされている。仁右衛門畑遺跡と比較すると、金場遺跡では如意形口縁の甕が多数を占めるのに対し、仁右衛門畑遺跡では如意形口縁と三角口縁

の甕がほぼ同数であり、地域性をよく示しているものと思う。さらに口縁部下に突帯を巡らす甕の比率が仁右衛門畑遺跡と比べて高い事も地域性を表したものと言えるだろう。なお口縁部外面が凹面状をなし、全体的なカーブが跳上口縁的なものは、仁右衛門畑遺跡は確実にそれと認定できるものは見出せなかった。

最後に、距離はやや離れるが、同じ筑後平野にある三国丘陵の土器と比較を行う。三国丘陵については片岡宏二氏によって中期の詳細な土器編年が組み立てられており、比較を行う上で非常に参考になる。仁右衛門畑遺跡でⅠa・Ⅰb期とした土器群のうち、甕については三国丘陵の編年でのⅠb期に相当する。しかし壺においてはⅠa期におさまるものであり、セット関係において食い違いが生じている。やはり仁右衛門畑遺跡では頸部が内傾する壺が長く採用されたものと解釈して良いだろう。仁右衛門畑遺跡でⅡ期としたものは、三国丘陵の編年のⅠb期の新しい段階からⅡa期の古い段階に相当すると思われる。

これまで見てきた結果によると、壺の頸部や甕の口縁部、外面口縁部下方の沈線と突帯の比率において仁右衛門畑遺跡の特徴とも言える差異を見出すことが出来た。これが果たして仁右衛門畑遺跡だけでの特徴なのか、または浮羽地域全体の地方色なのかは今後の事例をまって検討したい。

引用・参考文献

『堺町・大碇遺跡』	浮羽バイパス関係文化財調査報告	第８集	1994	福岡県教育委員会
『鷹取五反田遺跡Ⅰ』	浮羽バイパス関係文化財調査報告	第９集	1998	福岡県教育委員会
『四原Ｃ遺跡』	九州横断自動車道関係文化財調査報告	（３）	1984	福岡県教育委員会
『上の原遺跡Ⅰ』	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(18)	1990	福岡県教育委員会
『上の原遺跡Ⅱ』	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(27)	1993	福岡県教育委員会
『上の原遺跡Ⅲ』	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(33)	1995	福岡県教育委員会
『金場遺跡』	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(54)	1999	福岡県教育委員会
『剣塚遺跡群』	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告	-ＸＸⅣ-	1978	福岡県教育委員会
『三沢蓬ヶ浦遺跡』	福岡県文化財調査報告書	第66集	1984	福岡県教育委員会
『大板井遺跡Ⅱ』	小郡市文化財調査報告書	第14集	1982	小郡市教育委員会
『一ノ口遺跡Ⅰ地点』	小郡市文化財調査報告書	第86集	1994	小郡市教育委員会
『北松尾口遺跡Ⅰ地点』	小郡市文化財調査報告書	第54集	1989	小郡市教育委員会
『北松尾口遺跡Ⅱ地点』	小郡市文化財調査報告書	第63集	1990	小郡市教育委員会
『北松尾口遺跡Ⅲ・Ⅳ地点』	小郡市文化財調査報告書	第77集	1992	小郡市教育委員会

2. 浮羽郡内における弥生時代後期の土器について

今回編年の対象とする浮羽郡は、近年浮羽バイパス関連の継続的な発掘調査や町の調査が行なわれており、著しい資料の増加が確認される。これらを用いて郡内の弥生時代前期後半から中期前半、古墳時代土師器の編年的研究が行なわれている。上記2時期の資料に比べて弥生時代後期の資料はいささか時期の偏りやその絶対数の不足など少し問題点もあるが一編年試案として考えてみたいと思う。

研究小史

北部九州における弥生時代後期土器の編年研究史は

Ⅰ期　戦前

Ⅱ期　戦後から1970年代

Ⅲ期　1980年代前半

Ⅳ期　1980年代後半

Ⅴ期　1990年以降

の5時期に区分される。それぞれⅠ期は編年研究の始まりの時期、Ⅱ期は編年研究の活発化の時期、Ⅲ期は弥生時代後期土器編年の確立期（対象地域は広いことが多い）、Ⅳ期は土器編年に属性分析を用いだす時期、Ⅴ期は小平野単位で土器編年を行う時期であると言えるだろう。

したがって本稿では、土器の属性を抽出し、変化を追いつつ、その土器が共伴する一括性の高い遺構を用いて浮羽群内における弥生時代後期土器の変遷をたどることとする。

分析

弥生時代後期の土器はおおよそ壺、甕、高坏、鉢、器台、支脚の6形式から構成されており、壺ならば複合口縁壺、長頸壺、直口壺等々というようにそれぞれ小形式を含んでいる。本来、各形式、小形式ごとに属性を取り出し、その組み合わせから型式を設定することが必要である。しかし浮羽郡内においては各形式の資料が豊富にあるわけではなく、数個体しか確認できていないものもある。したがって、今回は抽出した各遺構に比較的安定して存在する在地系の壺、甕を主な資料として属性分析を行なうこととする。まず、その過程で設定された各型式の遺構における共伴状況から編年をくみ、他の4形式については住居における共伴事例から、大きな形で変化の流れを追うこととする。

（1）型式分類

1　複合口縁壺の分析と型式の設定

壺は資料数が多く、各時期において形態の変化が大きい複合口縁壺を分析資料とする。複合口縁壺の分析には岩永氏の口縁部形態、頸部形態、頸部の長短、胴部形態、胴部突帯の位置、底部形態の6要素に、頸部突帯の形態と本数、胴部突帯の形態および刻み目の有無の2要素を加えた8要素を用いる。その要素を数種に分類し、個体上における組み合わせから以下の6型式を設定した。

複合口縁壺1類　中期の袋状口縁壺の形態を残すもので口縁の反転部に稜が入らず、平底で胴が張るもの将来的には胴部・頸部の形態差から、さらに分類できるものも含む。

複合口縁壺2類　口縁反転部に弱い稜があるもので頸部は短い。また、時期が下ると頸部のしま

りを欠いてくる。平底のものが多い。

複合口縁壺３類　口縁反転部が強く内湾して内傾するものである。時期を下ると頸部は短頸から長頸に向かいしまりを欠くものもある。３類は底部の出土例が無いが平底から凸レンズ状底であると思われる。

複合口縁壺４類　口縁反転部が弱く内湾して内傾するもので、形態的に３類と５類の間である。頸部は長くなり、しまりがあるものは少ない。底部の出土例はないが３類と同様の形態を持つと思われる。

複合口縁壺５類　口縁反転部が直線的に内傾するもので、頸部が直線的に大きく開くものがでてくる。底部は平底から凸レンズ状底。

複合口縁壺６類　口縁反転部が一度内傾し再び立ち上がるものから、直立するものまで含む。底部は平底に近い凸レンズ状底から丸底に近いものまである。

２　広口壺の分析と型式設定

広口壺は口縁部形態、口唇部形態、胴部形態、底部形態の４要素を用いる。岩永氏は頸部のしまり具合も要素に挙げてあるが、浮羽郡内においては完形の土器が少ないため参考程度に留めておく。複合口縁壺同様、要素を数種に分解し各個体における組み合わせから以下の５型式を設定した。

広口壺１類　口縁部が中期的な形態を保つものである。低部は平底である。

広口壺２類　口縁部が直線的に立ち上がり、頸部内面に稜がないものである。口唇部は方形を呈す。時期を経るに従い胴部中位が張るものが増えてくる。

広口壺３類　口縁部が直線的で頸部内外面に稜が入るものである。口唇部は隅丸方形から方形を呈し、胴部最大径は胴部中位が張るものが多い。底部は平底で内湾しながら立ち上がる傾向にある。

広口壺４類　口縁部が外反しながら立ち上がり、頸部内外面に稜がないものである。口唇部の形態は様々で、底部は平底で内湾しながら立ち上がるものから凸レンズ状底を呈するものが多い。

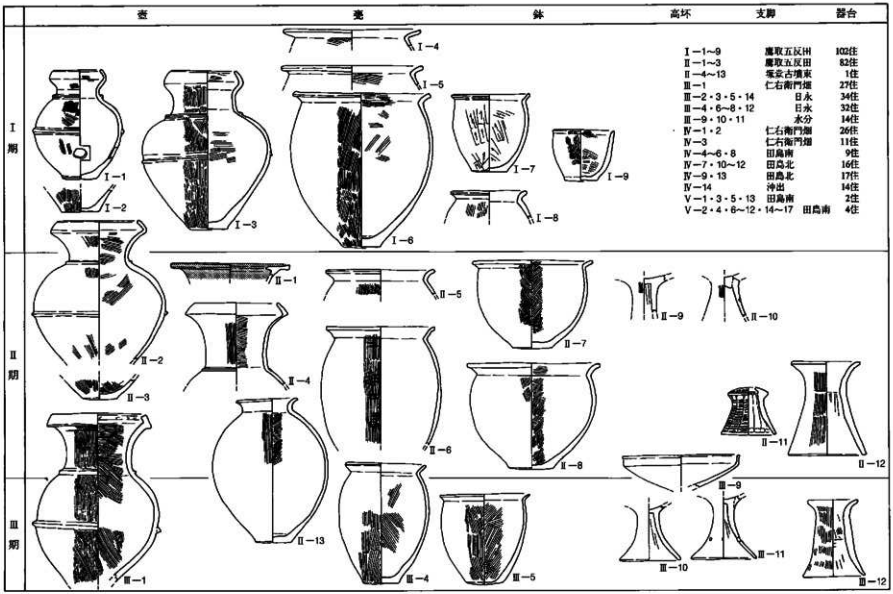
広口壺５類　口縁部が外反し頸部内面に弱い稜が入るものから無いもので、底部は凸レンズ状のものが多い。

（２）編年

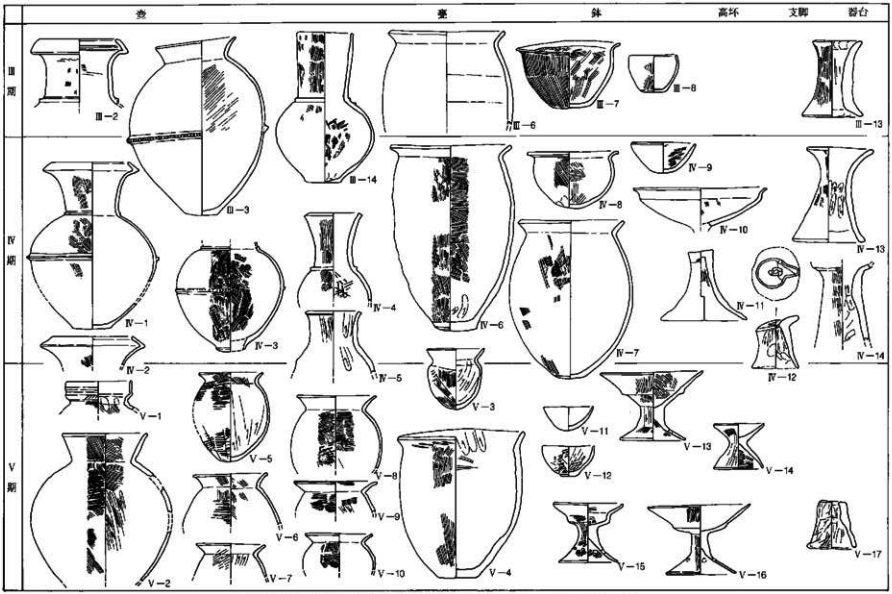
ここでは弥生時代後期を５期に区分し編年を試みる。このうちⅠ・Ⅱ期が高三潴式、Ⅲ・Ⅳ期が下大隈式、Ⅴ期が西新式に相当するものと考える。Ⅱ期とⅢ期は口縁が立ち上がる高坏の出現を、Ⅳ期とⅤ期は丸底に近い直口壺の出現を画期とする。Ⅴ期の新しい段階では庄内系・布留系土器が出現する。また、今日までの編年研究から土器の底部が平底→凸レンズ状底→尖底・丸底へと変化していくことが確認されており、その変化を中心に壺・甕の口縁部の形態変化を対応させる。この場合、基本的に住居跡等、比較的出土状況に一括性が想定される遺構から抽出した遺物をとりあげる。

Ⅰ期（第171図Ⅰ－１～９）弥生時代後期初頭である。図化した資料は鷹取五反田遺跡102号住居であるが、浮羽郡全体として一括資料は非常に少ない。

壺は複合口縁壺２類（Ⅰ－１～３）が確認される。弱い稜がはいる袋状口縁と平底から内湾しながら立ち上がる胴部形態から、Ⅰ期の中でも新しい様相を示す。後期初頭の複合口縁壺は短頸で袋状口縁を持つ塚堂古墳東地区１号住居跡出土の壺のようなものをさすのであろう。また、確認されていないが大型の鍋先口縁壺、広口壺の存在も想定される。甕は中期的口縁形態を持つ広口壺（Ⅰ－



第171図　浮羽郡の弥生時代後期土器編年図①（1/8）



第172図　浮羽郡の弥生時代後期土器編年図②（Ⅳ-3：1／16、他は1／8）

4～6)、直線的に立ち上がる口縁の広口甕（Ⅰ－7）丹塗りの広口壺（Ⅰ－8）がある。広口甕は平底で内湾しながら立ち上がり、胴部中位に最大径をもつもの、平底で外反しながら立ち上がる形態の2形態がある。鉢は素口縁（Ⅰ－9）である。平底で口縁端部を摘み上げる。内外面ともにハケ目を施す。高坏は確認されていないが、中期後半の鋤先口縁を持つものが存在すると思われる。

Ⅰ期は壺・甕ともに中期後半の形態を引きずりながらも整型、調整等が粗雑になる傾向があるといえるだろう。

Ⅱ期（第171図Ⅱ－1～11）弥生後期前半である。図化した資料は鷹取五反田遺跡82号住居、塚畠古墳東地区1号住居跡のものである。Ⅱ期はⅠ期と比べ資料の増加傾向がうかがえる。

壺は鋤先口縁を持つ広口壺（Ⅱ－1）、複合口縁壺、口径が小さい広口壺（Ⅱ－13）がある。複合口縁壺は短頸の2類（Ⅱ－2）としまりのない長頸で弱く内湾しながら内傾する口縁を持つ4類（Ⅱ－4）、図化していないが、強く内湾する口縁を持つ3類が存在する。底部は平底から平底に近い凸レンズ状底をもつ。広口壺も平底に近い凸レンズ状底である。甕は外反する口縁を持ち胴部中位が張ってくる広口甕4類（Ⅱ－5・6）と図化していないが肩部が張るものが存在する。底部を確認できる資料は少ないが、平底から凸レンズ状底を呈する。鉢（Ⅱ－7・8）は甕と同じような形態を持つ。胴部は張り、平底に近い凸レンズ状底を呈する。調整は内外面ともにハケメを施す。高坏は脚部のみの出土であるが、中期的なもの（Ⅱ－9）としまりが無く開いていくもの（Ⅱ—10）の2種類が確認できる。器台（Ⅱ－12）くびれ部が上位に位置するもので外面ハケメ、内面ナデを施す。支脚（Ⅱ－11）は器高の低い厚手のものである。口縁部は内傾し、外面にタタキを施す。

Ⅱ期は中期後半系統の土器が存在する最後の時期である。壺・高坏が比較的新しい段階まで残る傾向は玄海灘沿岸においても見られる様相である。

Ⅲ期（第171・172図Ⅲ－1～13）弥生後期中葉である。図化した資料は仁右衛門畑遺跡27号住居、日永遺跡2区32号住居、34号住居、水分遺跡14号住居のものである。

壺は複合口縁壺4類（Ⅲ－2）と長頸で直線的に内傾する口縁を持ち、球胴の複合口縁壺5類（Ⅲ－1）、直口化に向かう広口壺（Ⅲ—3）が存在し長頸壺（Ⅲ－14）が出現する。複合口縁壺は底部が残るものはないが凸レンズ状底を呈する。広口壺も凸レンズ状底を持ち、胴部最大径が中位に位置する。また、口縁が立ち上がる傾向にある。長頸壺は球胴のしまりが無く直線的に立ち上がる口縁部をもつ。甕は広口甕3類（Ⅲ—4・6）、広口甕4類（Ⅲ－5）が存在する。両者とも長胴化の傾向が著しく、底部は凸レンズ状底をもつものが増える。鉢（Ⅲ－19・20）は跳ね上がる口縁を持つものと素口縁のものがある。両者ともに凸レンズ状底のものが多い。高坏（Ⅲ－9～11）は中期の系統を引くものは無くなり、坏部が途中で屈曲し口縁部が立ち上がるものが出現する。脚部はしまりが無くラッパ状に開くもので、透かしを持つものもある。器台（Ⅲ－13）は、Ⅱ期よりもしまりの位置が上位に移る。

Ⅲ期は直口壺・口縁部が立ち上がる高坏の出現により、後期前半と画される。

Ⅳ期（第172図Ⅳ－1～14）図化した資料は仁右衛門畑遺跡11号、26号住居、田島南遺跡9号住居、田島北遺跡16号住居、17号住居である。

壺は複合口縁壺5類（Ⅳ－1）と直線的に内傾し、口縁端部が小さく外反する6類（Ⅳ－2）である。底部も丸底に近い凸レンズ状底を持つもの（Ⅳ－3）もある。長頸壺（Ⅳ－4・5）は頸部の付根が一度閉まり、立ち上がるにつれ広がる口縁を持つもので、胴部最大径が中位に位置する。

甕は広口甕４類（Ⅳ－６・７）でほとんど胴の張りが無いものや胴部中位に最大径が位置し張りがあるものが存在する。いずれも凸レンズ状底を持つ。鉢（Ⅳ－８・９）は凸レンズ状底から丸底を呈す。内外面ともハケ目を施す。高坏（Ⅳ－10・11）は坏部が途中で屈曲し外反するものである。脚部もより裾が広がる。器台は沓型器台（Ⅳ－12）と、口縁部が袋状を呈するものもある（Ⅳ－14）。

Ⅴ期（第172図Ⅴ－１～17）図化した資料は田島南遺跡2号、4号住居跡である。Ⅴ期では複合口縁壺は確認できていないが外来系の二重口縁壺（Ⅴ－１）が出土している。直口壺はやや開いた口縁部を持ち、胴部中位に最大径が位置するもので、新しい様相を示す。甕は内湾した口縁を持ち頸部に稜がない広口甕４類が出現する。頸部のしまりは弱い。また、Ⅴ期から他地域の影響を受けた甕が多く出現する。鉢も丸底化が進み（Ⅴ－11）タタキ痕を持つものもある（Ⅴ－12）。高坏は外反する口縁部がさらに伸びるものである（Ⅴ－13・16）。この他に瀬戸内系の高坏（Ⅴ－15）も出土している。

Ⅴ期は在地系の土器を凌駕する勢いで外来系の土器が流入してくる時期である。今回は検討した遺構数が少ないため詳細は不明であるがⅤ期を古相、図化したものの大部分を占める新相の二時期に区分できると考えられ、後者は古墳時代の初頭に位置付けられる。

（３）まとめ

本稿では浮羽郡の弥生時代後期土器編年試案を示した。その過程で気づいたことを記してまとめとしたい。

郡内には編年作業に耐えうる一括性の高い住居が20棟以上ある（本報告文を含む）。そこで上記のような属性分析を用いて時期を見ていくと、後期Ⅰ期が極端に少ないことが確認される。また、Ⅰ期からⅣ期まで次第に住居が増加する傾向にあるが、Ⅴ期に入ると３分の１ほどに減少することがわかる。遺構の数が少ないので後期初頭と弥生終末～古墳時代初頭に大きな画期があったとは断言できないが画期については今後着目すべきところであると思われる。

参考文献

岩永省三（1989）　「土器から見た弥生時代社会の動態―北部九州地方の後期を中心として―」『生産と流通の考古学』

常松幹雄（1991）　「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢』Ⅲ

小池史哲　「第８章　第3節　１．土器」

『塚堂遺跡』Ⅰ　浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告　第１集　1983　福岡県教育委員会

重藤輝行　「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽群の古墳時代土師器編年」

『仁右衛門畑遺跡』Ⅰ　浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告　第12集　2000　福岡県教育委員会

水ノ江和同　「大碇遺跡出土の弥生土器について」

『堺町・大碇遺跡』　浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告　第８集　1994　福岡県教育委員会

『日永遺跡』Ⅱ　浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告　第７集　1994　福岡県教育委員会

『鷹取五反田遺跡』Ⅰ　浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告　第11集　1998　福岡県教育委員会

『浮出遺跡』Ⅰ　浮羽町文化財調査報告書　第３集　1987　浮羽町教育委員会

『田島北遺跡』　浮羽町文化財調査報告書　第９集　1992　浮羽町教育委員会

『田島南遺跡』　浮羽町文化財調査報告書　第13集　1998　浮羽町教育委員会

『田主丸古墳群』　田主丸町文化財調査報告書　第２集　1985　田主丸町教育委員会

3. 弥生時代の遺構について

今回報告を行った弥生時代の仁右衛門畑遺跡では、竪穴住居跡23棟、土坑102基、甕棺墓1基、溝8条を検出した。これらは大きく弥生時代中期初頭～前半と、弥生時代後期中葉～後半の二時期に分けられる。この二つの時期の間には空白期間が存在し、継続的に集落が営まれていた訳ではない。以下ではこの二つの時期に属するそれぞれの遺構について検討を行いたいと思う。どちらの時期も検出できた遺構は集落全体のわずか一部分に過ぎず、これだけをもって集落の構造を把握することは到底なし得ない事である。また当地域の該期集落の調査事例もそれほど多くはなく、遺構を類型化することもまた困難である。従って結論は今後の調査の進行に期待し、今回は各遺構の時期的傾向と問題点の把握に努めたいと思う。

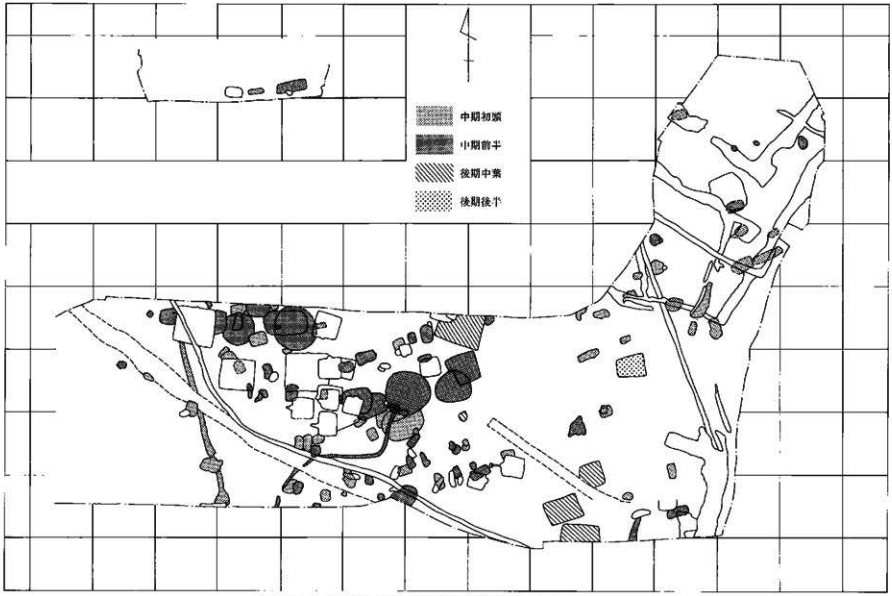
弥生時代中期初頭～前半　弥生時代の遺構のうち、大半がこの期に属しており、竪穴住居跡15棟、土坑101基、甕棺墓1基、溝7条を数える。

竪穴住居跡は調査区の中で最も高い位置に当たる中央付近に集中する。位置関係からみて分布の中心は更に北側へと展開することは間違いない。竪穴住居跡15棟の中で、中期初頭に属するものは56号竪穴住居跡一棟のみである。同時期の土坑の数からすれば相当数あると思われるが、調査区北側に展開するのだろう。中期前半に属するものは13棟、時期不明の円形竪穴住居跡である73号竪穴住居跡はこの期間内におさまるものと思われる。

平面形態は、中期初頭の56号竪穴住居跡は円形、中期前半には円形、楕円形、方形のものがあり、円形は6号・55号・64号・68号、楕円形は53号・54号・60号・61号・62号・67号、方形は5号のみとなる。このうち円形のものに関しては、中央に土坑を配し、周囲に主柱穴を巡らす基本的パターンを踏襲する。主柱穴は小型のものは5または6本、大型のものは8本を配置している。また大型に属する55号・68号竪穴住居跡で中央土坑両脇の棟持柱穴を検出している。このタイプの住居形態は中間研志により「発展松菊里型住居」とされたものである。中央土坑に関しては64号のように覆土に焼土を含んでおり炉と判断して差し支えないものもあるが、他のものには覆土に焼土・炭等を含まず、さらに73号においては中央土坑とは別に炉と思われる焼土面を検出しており中央土坑を炉として捉える事に躊躇する。6号竪穴住居跡の中央土坑から出土した砥石片の存在も含め、やはり再考する必要があろう。

楕円形プランの竪穴住居については数が多いにも拘わらず、残念ながら主柱穴、屋内土坑ともに配置規格が把握できるものがない。位置的に近く同時期の集落遺跡である朝倉町上の原遺跡の楕円形竪穴住居跡は、中央に土坑、その両側に2本の主柱穴を配した例が確認されており、当遺跡の例も同様と考えられる。ただし大型の67号竪穴住居跡はとても2本柱で支えきれるとは思えず、更にもう何本か配置されたものと思う。

同一集落内における円形プランと楕円形プランの同時併存については、弥生時代中期後半に一般化する長方形プランの住居形態を含め、円形から楕円形を経て長方形へと至る形態変遷を辿りたくなるが、当遺跡では中期前半に確実に両者が併存し、また先述の上の原遺跡でも同様で、さらに小郡市の一ノ口遺跡や同北松尾口遺跡では前期の段階で既に円形、楕円形、長方形が併存しており一系的な変遷はたどれそうにない。地域的、或いは時期的に分布が偏る傾向はあるものの、別個の系統の住居形態が長期間存続したとみた方がよいだろう。



第173図　仁右衛門畑遺跡弥生時代主要遺構変遷図（1／600）

土坑に関しては平面形が長方形或いは長方形に近い楕円形のものが多く、断面の形状は袋状となるものがほとんどない。平面形が円形のものは全く見られない。その大半は貯蔵穴として掘削・機能し、役割を終えた後に廃棄土坑として利用されたものと思われる。ただ、68号土坑としたものは他のものに比べて深く湧水点まで達し、また中心に向かって階段状に落ちており井戸の可能性が高い。貯蔵穴の平面形に関しては、小郡市一の口遺跡では前期末～中期初頭に円形のものが増加するが、前後の時期は長方形が主流である。朝倉町上の原遺跡では当遺跡と近い位置にあるにも拘わらず、円形や楕円形のものが多数を占め、明確な長方形のものは全くなく当遺跡と対照的である。同じ町内で時期的にやや遡る大碇遺跡では長方形・楕円形が多数を占めるものの、円形も少なからず存在する。貯蔵穴の平面形態は集落によってその採用がまちまちというのが現段階の到達点であり、特に時期的・地域的傾向を見いだせないように思われる。或いは貯蔵法や上部構造その他の機能面によるものなのであろうか。周辺地域の今後の調査に期待したい。

土坑の分布位置は大きく二ヶ所に分かれる。一つは竪穴住居跡と同様に調査区の中で最も高い位置に当たる中央付近に集中する。これは一棟の竪穴住居跡に数基の貯蔵穴が伴う各戸保有の貯蔵形態と考えることができる。もう一ヶ所は調査区の北東側に集中し、付近には竪穴住居跡が見られず土坑群のみで構成される一群である。竪穴住居が削平された可能性もない訳ではないが、この一群は竪穴住居に伴う土坑と比べて大型で整った長方形のものが多く、また31号・34号・41～43号・45～47号のように主軸方向をそろえたものがあるなど各戸保有の貯蔵穴群と異なる特徴的な要素が見られる。居住区とは離れた位置にあって別個の群を形成しており、やはり共同管理的な性格を持った貯蔵穴群と位置付けた方が適当であろう。

集落の形成時期は、出土土器からみて弥生時代中期初頭の古い段階に始まったと思われる。竪穴住居跡の検出数こそ少ないものの、土坑の数からして本来は相当数あったに違いない。集落は中期前半まで存続するが、遺構数や配置状況それほど変化があったとは思えず、形成期から終焉期までほとんど規模を変えずに存続したようである。中期前半を境に集落は終焉を迎えている。

弥生時代後期中葉～後半　この期のものは竪穴住居跡5棟、土坑1基、溝1条を数える。中期の集落とはまったく継続せず、新たに形成された集落である。遺構のほとんどは調査区の中央からやや東に寄った位置にあるが、42号溝だけはかなり離れた位置にあって、果たして同一集落として良いものかどうか疑問である。いずれにしろ調査区が集落のほんの一部をかすめただけに過ぎず、集落全体の景観を復元するまでには至らない。

時期別に見れば、20号竪穴住居跡が後期後半に位置付けられる以外は全て後期中葉のものである。竪穴住居跡は18号が正方形で4本の主柱穴を持ち、中央に炉を配置する。26号は恐らく長方形で2本主柱、中央に炉を配置する形となろう。ベッド状遺構は有していない。11号・27号はどちらも長方形で2本主柱、中央に炉を配置し整際土坑を有するタイプである。ベッド状遺構の形状は異なり、11号は2方向のコーナーにのみ付き、27号はコ字状に巡る。同一集落内でのほぼ同時期の竪穴住居でこの様なバリエーションが現れるのか興味深い所である。当遺跡に限らず他の遺跡でも同様であり、系統の伝播経路も含めて今後地域性をさらに追及するよう努めたい。

V　自然科学系の分析

1. 仁右衛門畑遺跡出土鉄器の分析

東北芸術工科大学芸術学科助手　松井敏也

はじめに

調査される資料は3点あり、これらは考古学視点から鉄斧の再加工品だと考えられていた。これらの遺物の推定される時代（紀元頃）の鉄斧は鋳造されることが多い。出土した鉄製遺物の製造方法の推定と成分分析による遺物の原材料の推定を行った。全ての資料は出土後の処理により薄く樹脂で覆われていた。

実験方法

・構造調査：X線透過撮影装置を使用した。

・断面組織観察：構造調査の結果をもとに金属部位を切断し、断面を作成した。エポキシ樹脂に包埋し、鏡面研磨した後、3％硝酸エチルアルコール溶液にてエッチングし、光学顕微鏡、走査型電子顕微鏡にて観察した。

・成分分析：組織観察用に採取した試料を用い、表面のさび層を除去後、構成成分を分析した。

分析元素：C, Si, Mn, P, S, Cu, Ni, Co, Ti

分析方法：C, S　…　燃焼赤外線分析法

他元素　　…　ICP発光分光分析法

結果

構造調査と断面組織観察

X線透過写真を図1に、断面組織観察部位を図2に示す。

X線透過写真により3点とも金属の部分が残存していることがわかった。特に、No.71は重量が74gあり、重量感を持つ。

【No.71】（112号土坑出土鉄器、第169図-182）

断面はさびが大部分を占め、頂点の窪みに金属が残る表面の層と金属が殆どを占める内部の2つから構成されることがわかる。内部の部分はレーデブライト組織（炭素量4.3％）が観察された（図3）。これは鋳造時、鋳込み後に急冷されることにより生じる共晶組織である。また、組織中の棒状になる初晶のセメンタイトはその多くが表面に垂直に成長していることが観察できた。これらのことからこの組織は鋳鉄であることがわかった。レーデブライト組織の大部分は耐食性を持つセメンタイトで構成されているため、腐食の影響を受けてはいない。頂部の窪みに残存する金属組織はフェライト（炭素量0.01％以下）組織であった。内部のレーデブライト組織との界面の写真を図4に示す。界面ではパーライトとフェライトの混在する層が確認でき、炭素が内部から拡散していることがわかる。これらのことから、頂部では鋼を長時間の加熱により張りつけたものと推察できる。また、表面のさびの部分も本来は鋼であったものがさび化したものと考えられる。

【No.72】（81号土坑出土鉄器、第169図-183）

構造調査からは内面のさび化が進行していることがわかった。中央部には金属部分が残存していた。断面組織からは、金属部分の中央部分に黒色球状を呈する黒鉛が観察された（図５）。黒鉛の周囲はパーライト組織が確認できたが、外側にいくにしたがいフェライト組織が主に占めるようになる（図６）。これらのことから外側は焼き鈍し、脱炭されていることが明らかになった。この試料は本来鋳造により製作され、周縁部には急冷により生じたレーデブライトが、中心部には片状黒鉛が生成していたものと考えられる。その後、長時間加熱処理をして脆い鋳鉄に靭性をもたせたものと考えられる。

【No.73】（44号土坑出土鉄器、第169図-184）

断面のマクロ組織の写真を図７に、ミクロ組織の写真を図８に示す。試料No.72と同様に、残存する金属部分に数10μmの大きさの球状を呈する黒鉛が観察できた。鋳造製品であることがわかる。表面にいくにしたがい黒鉛の分布は少なくなっており、鋳造後に脱炭されたと考えられる。

成分分析

断面組織の観察をした箇所より成分分析用にサンプリングを行った。混和したさびを除去した後エタノールで洗浄した。結果を表に示す。

表　鉄製遺物の成分分析結果

試料	炭素	ケイ素	マンガン	リン	硫黄	銅	ニッケル	コバルト	チタン
第169図 - 182	4.51	0.11	0.035	0.28	0.036	0.007	＜0.005	＜0.005	＜0.005
第169図 - 183	0.66	0.11	0.022	0.32	0.034	0.042	0.007	＜0.005	＜0.005
第169図 - 184	0.51	0.12	0.041	0.24	0.034	0.014	＜0.005	＜0.005	＜0.005

（単位：ｗｔ％）

試料No.71は炭素が多く検出された。これは金属部分を占める組織がレーデブライト組織であることに起因する。レーデブライト組織は炭素量が4.3％の共晶組織である。試料No.72、No.73では金属部分に球状黒鉛が存在していたが、分析結果からは炭素は少ししか検出されていない。黒鉛は研磨および試料調整時に除かれたためと思われる。したがって、これら２つの試料についてはフェライト組織の成分値が分析されている。すべての試料においてリンが多く検出されている。日本の国内における砂鉄はリンの含有量が0.0数％であることが言われている。これらの含有量から原材料は鉄鉱石系である可能性が高いといえよう。

まとめ

- すべて鋳造鉄製品であると考えられた。
- 試料No.71の材質はレーデブライト組織を持ち、鋳込み後急冷されたことがわかった。また、鋼の板が加熱接合されていたことがわかった。
- 試料No.72、No.73は加熱脱炭処理が施されており、黒芯可鍛鋳鉄であることがわかった。
- リンの含有量が高く、原材料は鉄鉱石系である可能性が高い。

図１　断面組織採取切断部位　左：No.71　中央：No.72　右：No.73

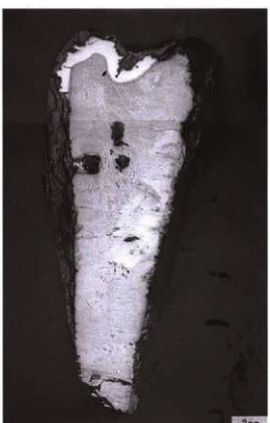


図２　No.71の断面マクロ観察

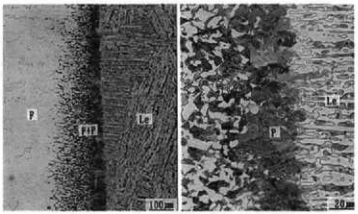


図3　No.71の頂部に残存した金属層と内部の金属部位との界面
Le：レーデブライト組織　F：フェライト組織　P：パーライト組織

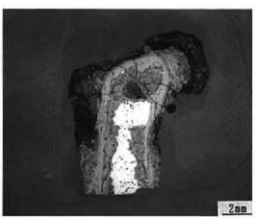


図4　No.72の断面マクロ観察

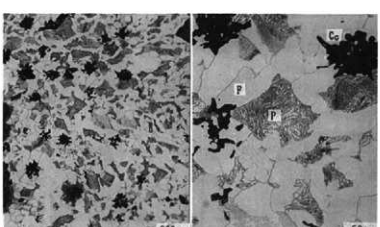


図5　No.72の断面ミクロ組織　Ccの左：黒鉛　F：フェライト組織　P：パーライト組織

図6　No.73の断面マクロ観察

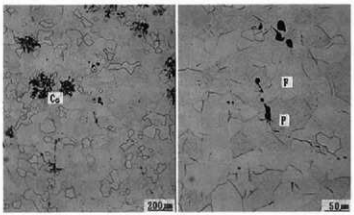


図7　No.73の断面ミクロ組織　C_G左：黒鉛　F：フェライト組織　P：パーライト組織

2. 仁右衛門畑遺跡出土土器の胎土分析

（株）九州環境管理協会

はじめに

本報告書は、福岡県の委託を受けて財団法人　九州環境管理協会が実施した「出土遺物の胎土分析」についてとりまめたものである。

1. 試料名および分析項目

試料名および分析項目を表１に示す。

表１　試料名及び分析項目

報告書名	試料名	挿図番号	分析項目
	39号竪穴住居跡出土須恵器広口壺	第68図 - 25	
	42号竪穴住居跡出土土師器高坏	第72図 - 31	
仁右衛門畑遺跡	42号竪穴住居跡出土須恵器壺	第73図 - 51	胎土分析
	93号竪穴住居跡出土須恵器坏	第133図 - 12	
	41号溝出土須恵器甕	第190図 - 17	
	41号溝出土須恵器鉢	第190図 - 15	

2. 胎土分析

(1) 分析方法

土器片をめのう乳ばちで粉砕し、105～110℃で4時間乾燥した。乾燥した土器片を1.000g分取し、硝酸、フッ化水素酸、過塩素酸による分解を行った後、200mLに定容した（過塩素酸—塩酸性溶液）。この溶液についてICP発光分光分析（Fe,Ca,Sc,Sr,Rb）および原子吸光分析（K,Na）を実施した。

(2) 分析結果

分析結果を表２に示す。

表２　土器の胎土分析

元素 / 試料名	Na	K	Ca	Sr	Sc	Fe	Rb
第68図 - 25	0.455	0.347	0.460	0.370	4.92	3.28	0.453
第72図 - 31	0.642	0.605	0.358	0.603	2.77	3.14	0.906
第73図 - 51	0.383	0.350	0.386	0.359	5.23	3.09	0.503
第133図 - 12	0.443	0.596	0.132	0.429	2.00	2.83	1.094
第190図 - 17	0.418	0.493	0.057	0.272	2.15	2.21	0.785
第190図 - 15	0.415	0.538	0.197	0.484	1.69	1.45	0.994

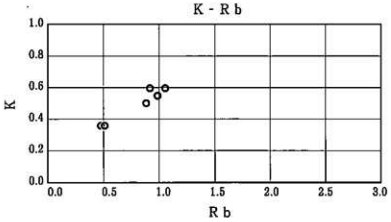
注）表２の測定は、通産省工業技術院地質調査所の岩石標準試料「JG-１」の濃度に対する相対値である。「JG-１」の各元素の標準値は表３のとおりである。各土器について濃度を得る場合は、表２の測定値（相対値）に表３の標準値を乗ずる。

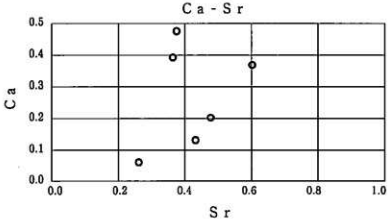
表３　ＪＧ-１の標準値

元素	Ｎａ	Ｋ	Ｃａ	Ｓｒ	Ｓｃ	Ｆｅ	Ｒｂ
標準値	25076	32872	15723	184	6.5	15328	181

mg／kg

参考資料





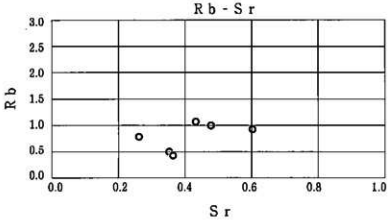


図　版

1. 調査区中央全景（空中写真　南東から）

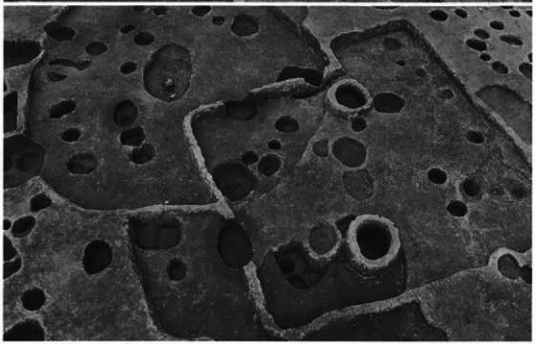
2. 調査区中央北側全景（空中写真　南東から）

図版 2

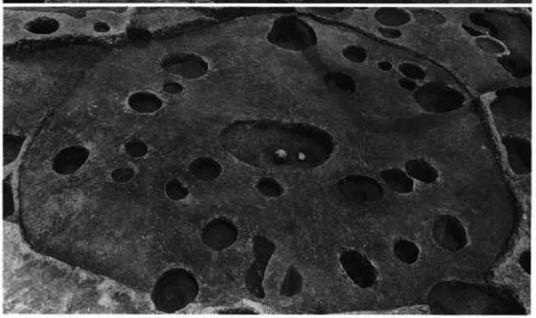
1. 調査区南東全景（空中写真　上空から）

2. 調査区南東端　第二遺構面全景（東から）

1. 5号竪穴住居跡
(東から)



2. 5・6・10号竪穴住居跡
(東から)

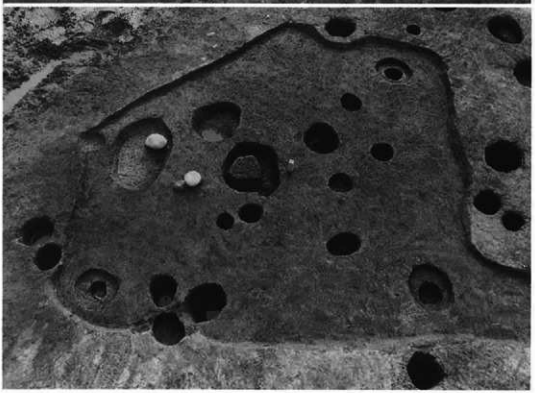


3. 6号竪穴住居跡
(南から)

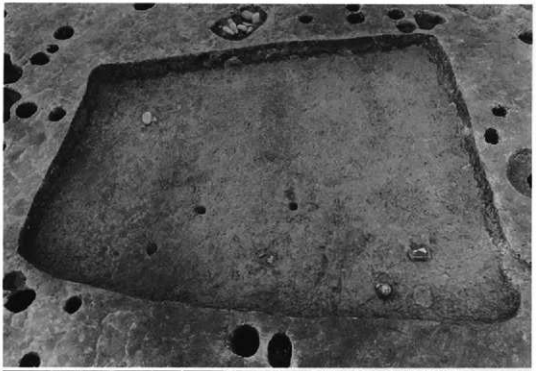
図版 4

1. 11号竪穴住居跡
(南から)

2. 11号竪穴住居跡
遺物出土状態
(北から)

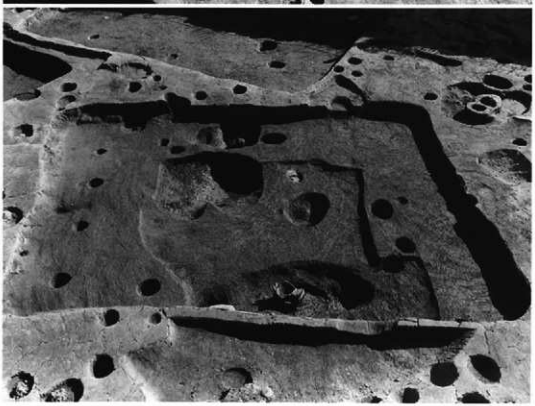


3. 18号竪穴住居跡
(東から)



1. 20号竪穴住居跡
（西から）

2. 26号竪穴住居跡
（北から）

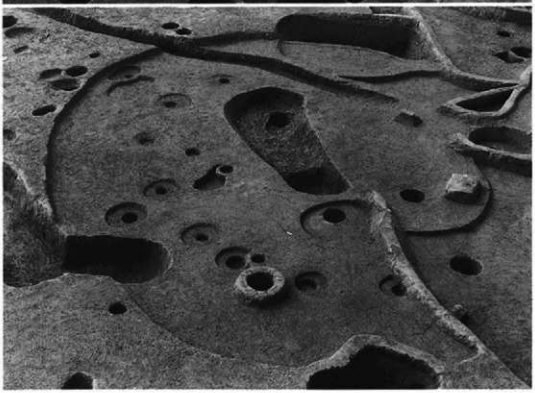


3. 27号竪穴住居跡
（北から）

図版 6

1. 53・54号竪穴住居跡
（北から）

2. 55・56号竪穴住居跡
（東から）



3. 56号竪穴住居跡
（東から）

1. 60号竪穴住居跡
(南から)

2. 調査区中央北側
遺構確認状態
(東から)

3. 同　完掘状態
(東から)

図版 8

1. 61号竪穴住居跡
（南から）

2. 62・63号竪穴住居跡
（西から）

3. 64号竪穴住居跡
（西から）

1. 66号竪穴住居跡
（南から）

2. 67号竪穴住居跡
（南から）

3. 68号竪穴住居跡
（南から）

図版 10

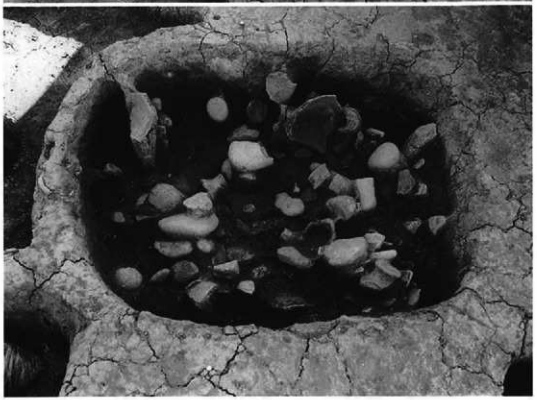
1. 1号土坑（北から）

2. 2号土坑（東から）

3. 11号土坑（北から）

1. 12号土坑（西から）

2. 13号土坑（北から）



3. 17号土坑（東から）

図版 12

1. 18·19号土坑（東から）

2. 20号土坑遺物出土状態（西から）

3. 20号土坑（西から）

1. 21号土坑（東から）

2. 22号土坑（南から）

3. 23号土坑（西から）

図版 14

1. 24号土坑（南から）

2. 26号土坑（南から）

3. 27号土坑（東から）

1. 28号土坑（北から）

2. 29号土坑（西から）

3. 30号土坑（南から）

1. 31・34・46号土坑
(西から)

2. 31・46号土坑（北から）

3. 34号土坑（北から）

1. 35号土坑（東から）

2. 37号土坑（北から）

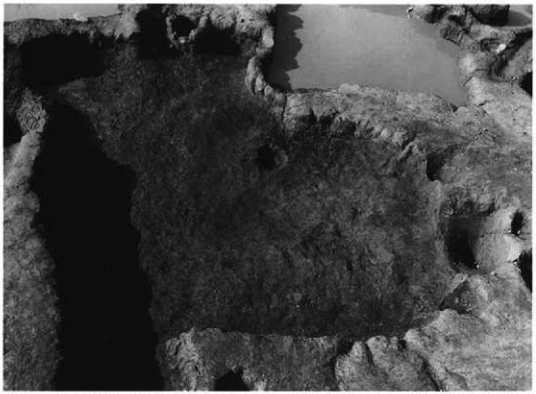
3. 38号土坑（東から）

図版 18

1. 41号土坑（南から）

2. 43号土坑遺物出土状態（南から）

3. 43号土坑（南から）



1. 44号土坑（南から）

2. 45号土坑（北から）

3. 51号土坑（西から）

図版 20

1. 52号土坑（東から）

2. 53号土坑（南から）

3. 55号土坑（南から）

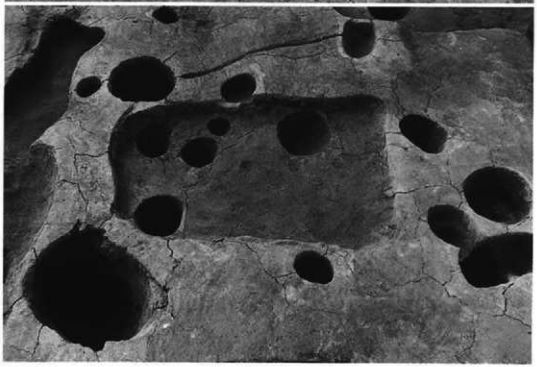
1. 56号土坑遺物出土状態（南から）

2. 56号土坑（南から）

3. 58号土坑（南から）

1. 60号土坑（北から）

2. 61号土坑（北から）



3. 62号土坑（北から）

1. 64号土坑（北から）

2. 65号土坑（北から）

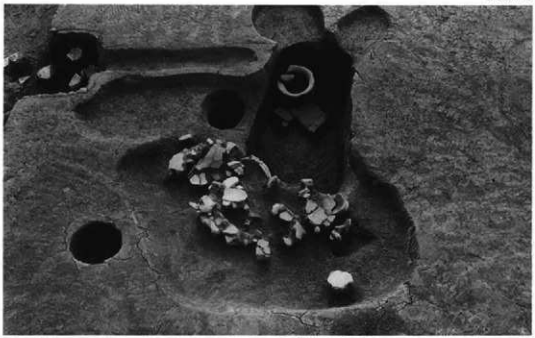
3. 66号土坑（北から）

図版 24

1. 68号土坑（南から）

2. 69・70号土坑（西から）

3. 72号土坑（西から）



1. 74号土坑（北から）

2. 76・77号土坑（西から）

3. 78号土坑（東から）

1. 79号土坑（東から）

2. 80号土坑（東から）

3. 80号土坑（西から）

1. 81号土坑（北から）

2. 82号土坑（東から）

3. 85号土坑（南から）

1. 86号土坑（東から）

2. 87号土坑（南から）

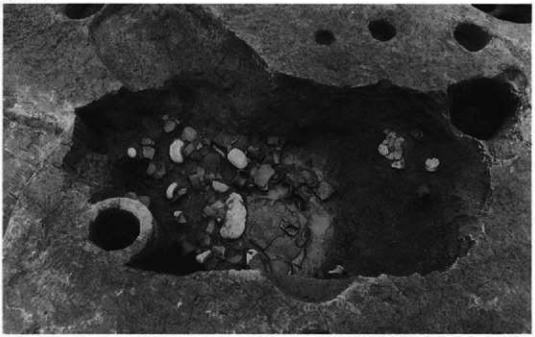
3. 88号土坑（東から）

1. 92号土坑（南から）

2. 93号土坑（南から）

3. 96号土坑（北から）

図版 30



1. 97号土坑（東から）

2. 99号土坑（北から）

3. 100号土坑（南から）

1. 102号土坑（東から）

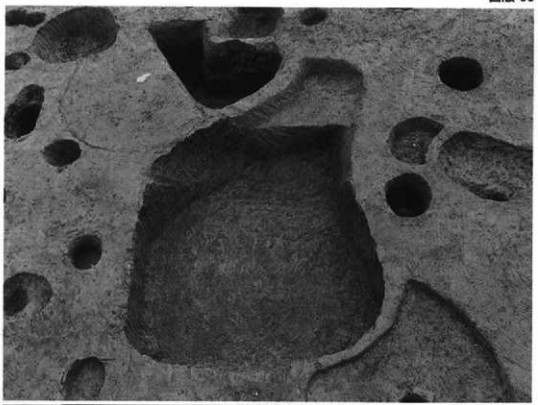
2. 103号土坑土層（西から）

3. 103号土坑（北から）

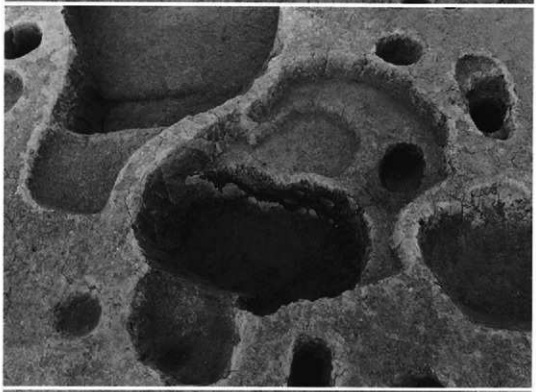
1. 104号土坑（北から）

2. 105号土坑（西から）

3. 106号土坑（南から）



1. 107号土坑（東から）



2. 108号土坑（南から）

3. 109号土坑（東から）

図版 34

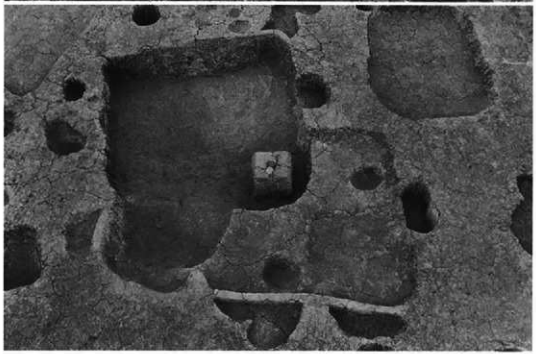
1. 110号土坑（西から）

2. 67・68号竪穴住居跡
111・112号土坑
（南西から）

3. 112号土坑（北から）

1. 113号土坑（西から）

2. 116号土坑（東から）

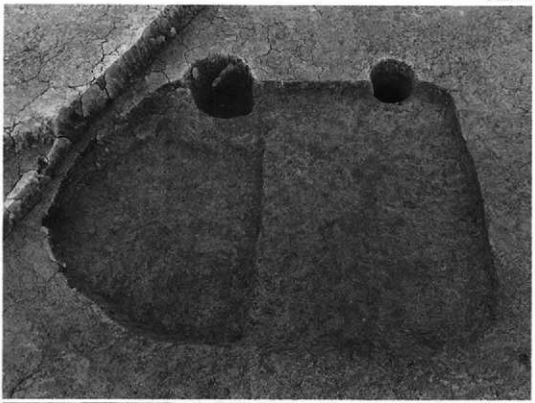


3. 117・118・124号土坑
（北から）

1. 119号土坑（東から）

2. 121号土坑（東から）

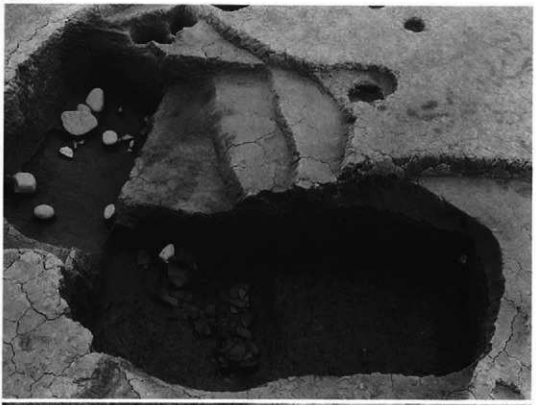
3. 73号竪穴住居跡、
122号土坑
（南から）



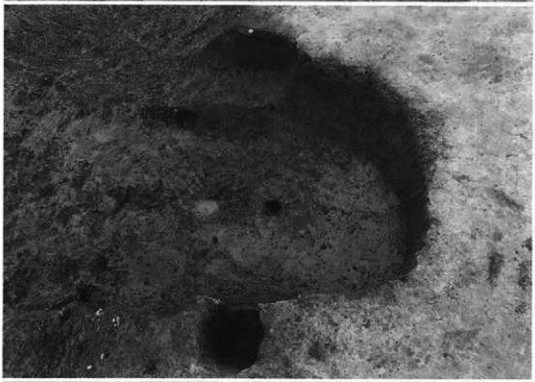
1. 123号土坑（西から）

2. 125号土坑（西から）

3. 126号土坑（南から）



1. 128号土坑（北から）



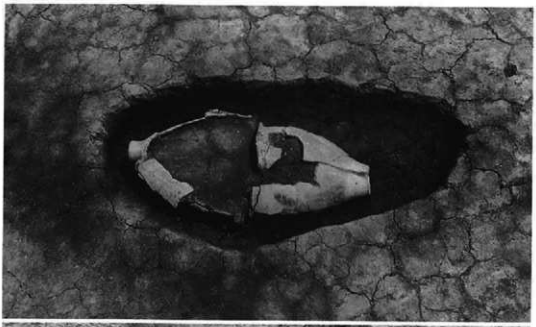
2. 129号土坑（西から）

3. 130号土坑（北から）

1. 132号土坑（南から）

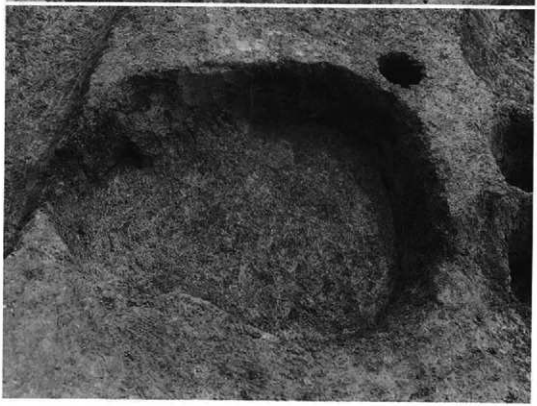
2. 133号土坑（南から）

3. 134号土坑（西から）



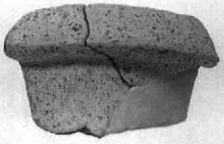
1. 1号挑棺墓（東から）

2. 25号溝断面土層（北から）



3. P-169（西から）

11-1



11-2

11-3

11-4

11-5

11-6

11-7

11-8

11-9

11-10

11号竪穴住居跡出土土器

18-5

18-6

18-9

20-14

20-15

26-2

26-5

26-8

26-12

26-16

26-21

18・20・26号竪穴住居跡出土土器

26-22

26-23

26-24

26-26

27-1

27-4

27-5

27-10

27-18

27-21

26・27号竪穴住居跡出土土器

27-9

27-28

27-22

27-29

27-31

27-23

27-45

56-32

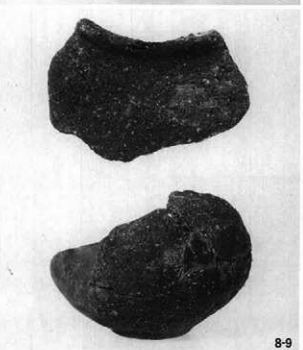
27-27

60-9

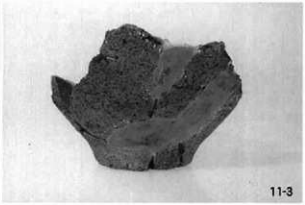
27・56・60号竪穴住居跡出土土器

1-2

2-7


8-9

11-4


11-3

11-11

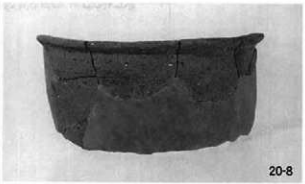
19-17

19-18

20-4

1・2・8・11・19・20号土坑出土土器

20-5


20-8

20-6

20-13

20-7

20-17

30-3

20-9

30-7

20・30号土坑出土土器

30-9

31-7

30-13

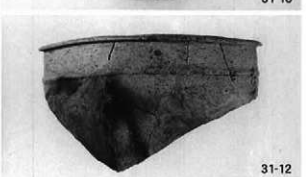
31-9

31-1

31-2

31-10

31-3


31-12

31-20

30・31号土坑出土土器

34-3

34-5

34-6

34-16

34-21

34-22

34-24

34-26

34号土坑出土土器①

34-27

34-41

34-31

34-43

34-32

34-45

34-33

34-47

34-40

34-50

34号土坑出土土器②

34-51

34-69

34-70

34-71

35-5

35-12

42-4

42-6

42-12

43-4

34・35・42・43号土坑出土土器

43-6

43-7

43-8

43-21

43-22

43-23

43-24

43-30

43-31

43-32

43号土坑出土土器

43-33

43-36

43-38

43-41

43-42

43-56

43-44

44-4

44-6

45-1

43～45号土坑出土土器

45-2

55-6

55-8

52-5

56-1

56-2

53-9

56-4

45・52・53・55・56号土坑出土土器

56-7

57-2

56-10

58-1

56-18

58-3

57-1

58-5

56～58号土坑出土土器

58-8

58-9

59-5

61-19

68-1

68-2

68-3

68-5

68-12

58・59・61・68号土坑出土土器

68-13

68-16

68-30

69-1

70-8

70-16

72-8

72-12

72-13

68～70・72号土坑出土土器

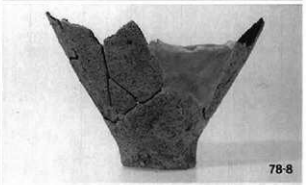
74-3

76-11

76-12

78-7

79-9


78-8

78-9

80-14

80-17

74・76・78～80号土坑出土土器

80-12

85-4

81-6

85-6

81-10

85-7

82-5

86-1

82-6

87-3

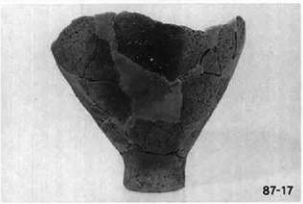
80～82・85～87号土坑出土土器

87-1

88-13

87-16

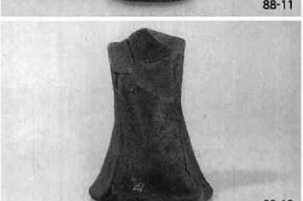
92-1


87-17

92-2

88-11

92-3


88-12

92-11

87・88・92号土坑出土土器

92-18

93-1

93-5

93-6

96-8

97-6

97-19

97-27

100-1

92・93・96・97・100号土坑出土土器

100-3

100-4

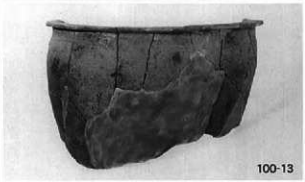
100-8

100-9

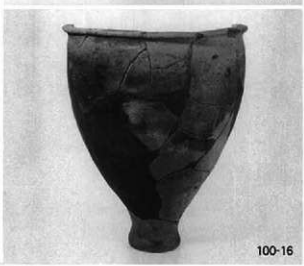
100-10

100-11

100-12


100-13

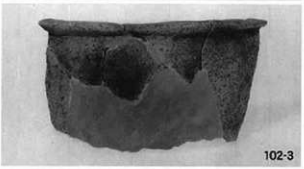
100-14


100-16

100号土坑出土土器

100-17

103-2

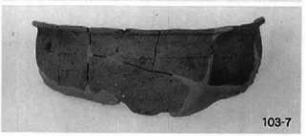

102-3

103-3

102-14

103-6

102-15

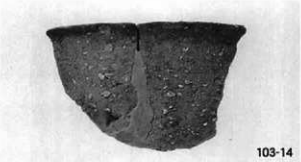

103-7

103-1

103-10

103-13

100・102・103号土坑出土土器


103-14

105-6

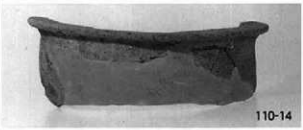
105-7

105-8

105-17

107-2

109-4


110-14

110-16

121-21

103・105・107・109・110・121号土坑出土土器

125-8

126-4

125-11

126-7

125-13

126-10

126-3

127-4

125～127号土坑出土土器

128-5

128-16

129-2

128-2

130-3

128-10

133-9

128-11

133-11

128～130・133号土坑出土土器

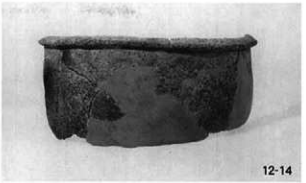
12-2

12-4

12-5

12-7

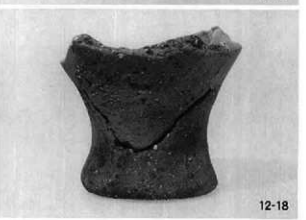
12-8


12-14

12-15

12-16

12-17


12-18

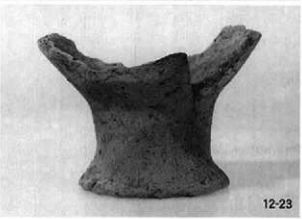
12号溝出土土器

12-19

12-20

12-21

12-22


12-23

12-24

12-25

25-1

42-1

42-2

12・25・42号溝出土土器

42-4

42-5

42-6

42-7

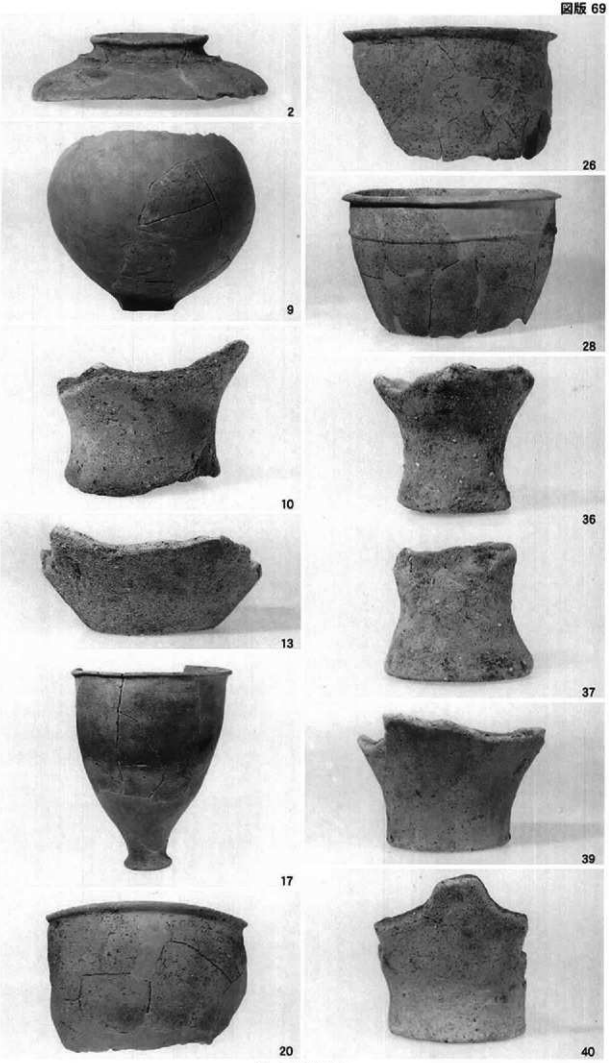
42-8

42-9

1

2

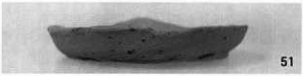
42号溝、1号甕棺墓出土土器



ピット出土土器①

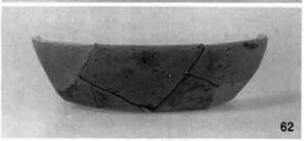
43

46


51

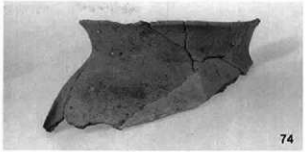
53

54


62

64

68


74

77

84

85

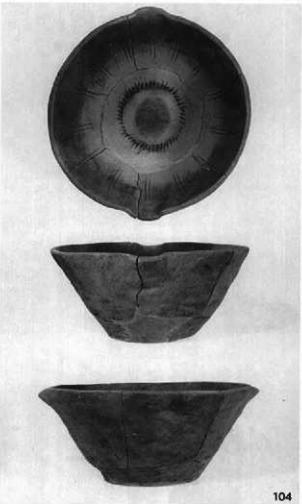
88

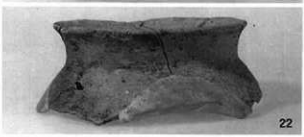
89

90

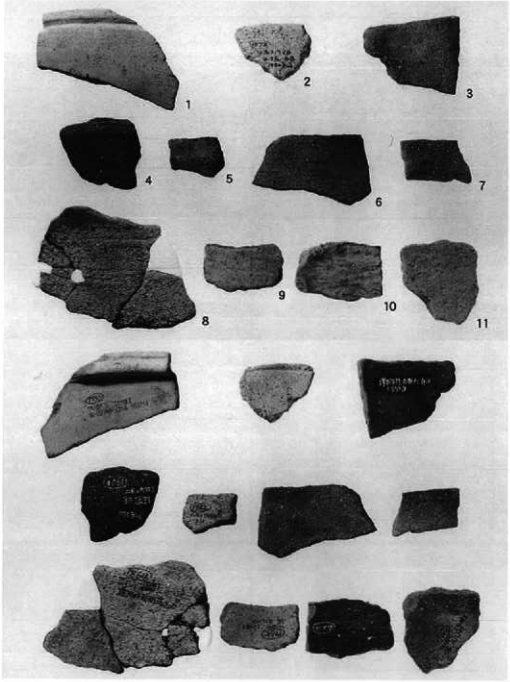
92

ピット出土土器②

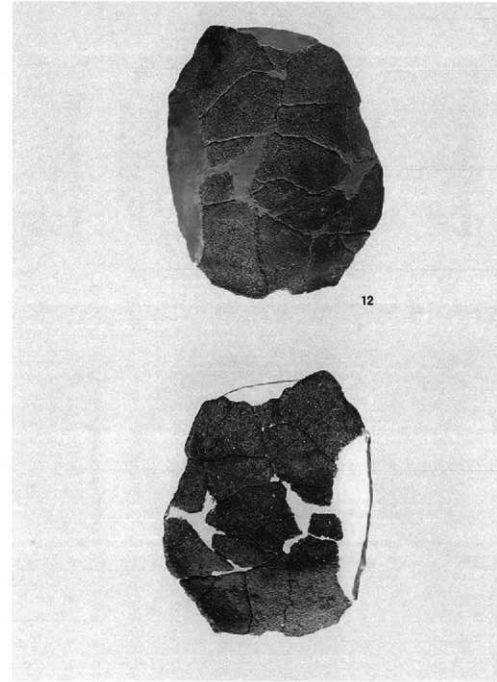




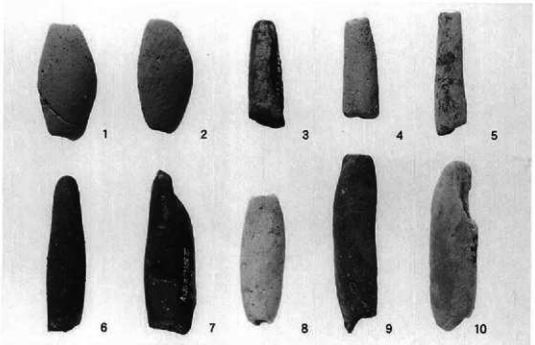
ピット、その他出土土器



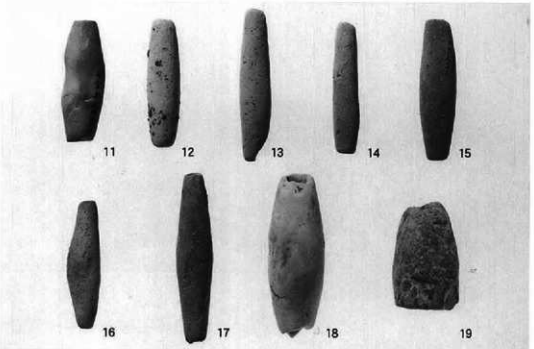
1. 縄文土器①



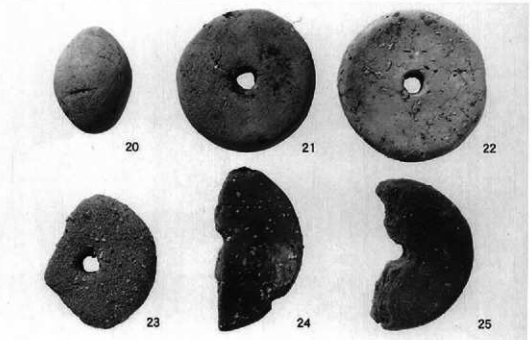
2. 縄文土器②



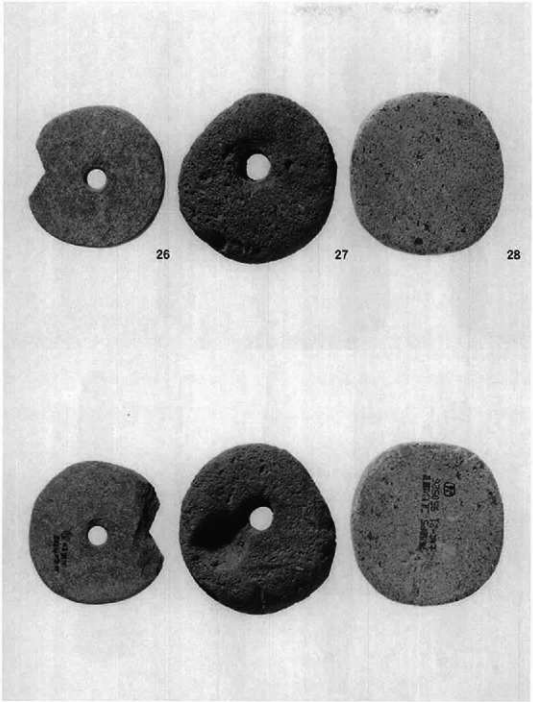
1. 土錘①



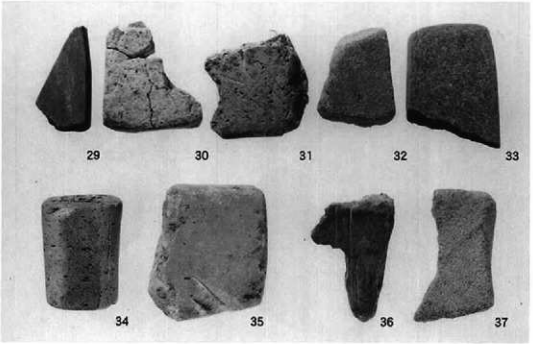
2. 土錘②



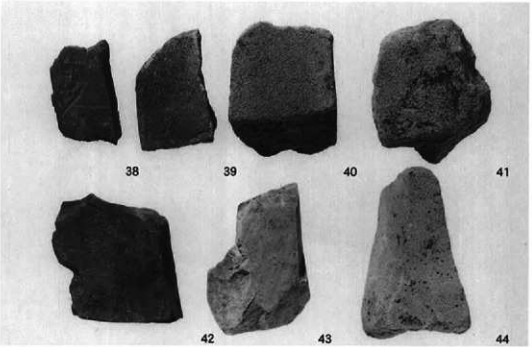
3. 投弾、土製紡錘車



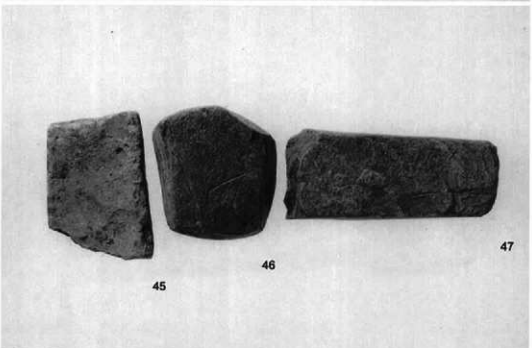
1. 石製紡錘車、浮子、円盤状石製品



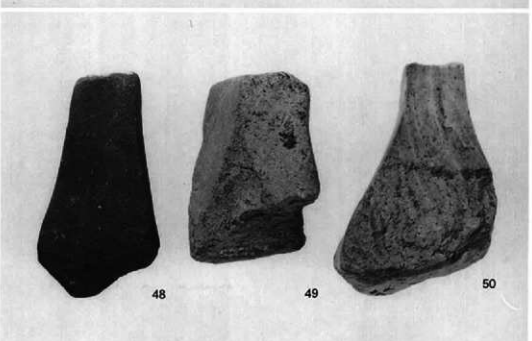
2. 砥石①



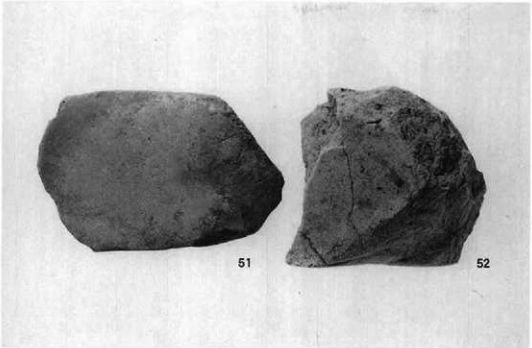
1. 砥石②



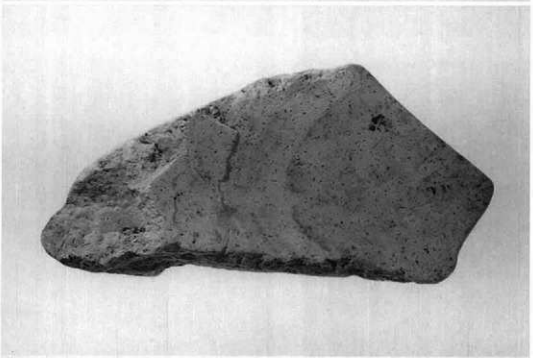
2. 砥石③

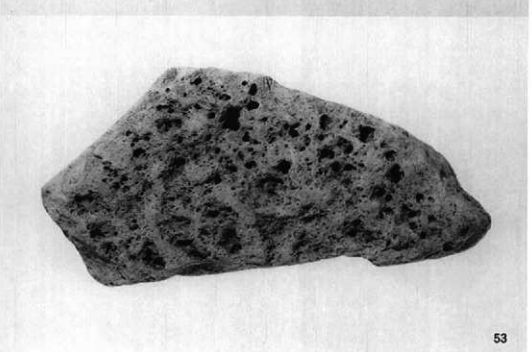


3. 砥石④

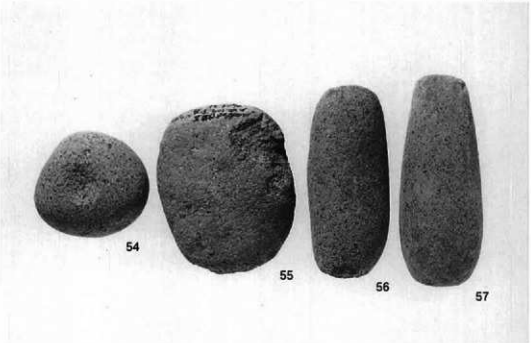


1. 砥石⑤



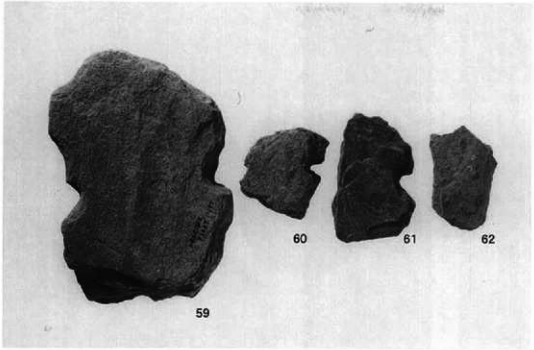


2. 砥石⑥

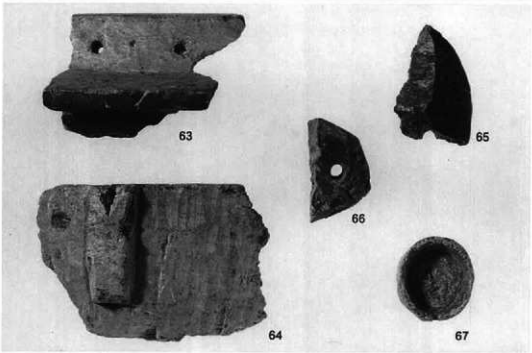


1. 凹石、敲石

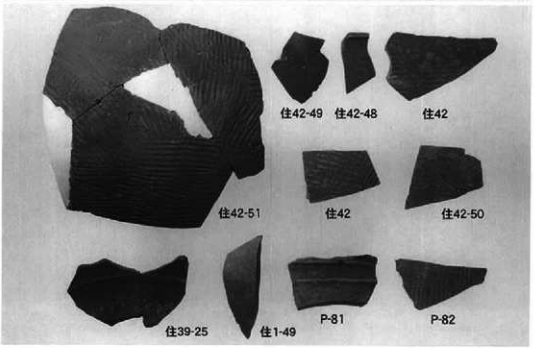
2. 石皿



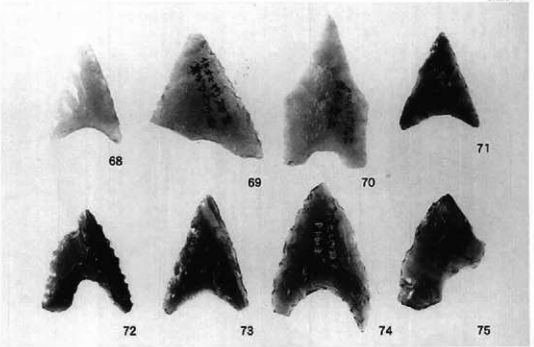
1. 石錘、不明石製品



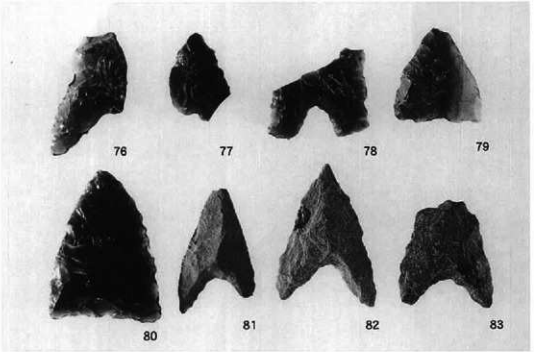
2. 滑石製品



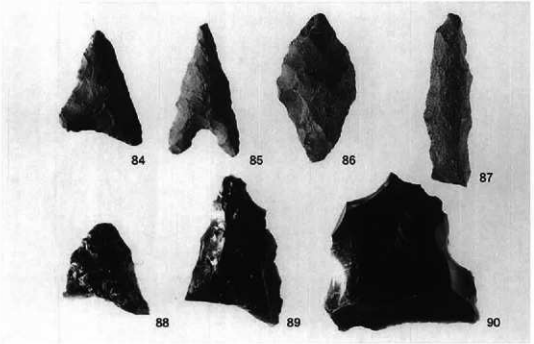
3. 初期須恵器



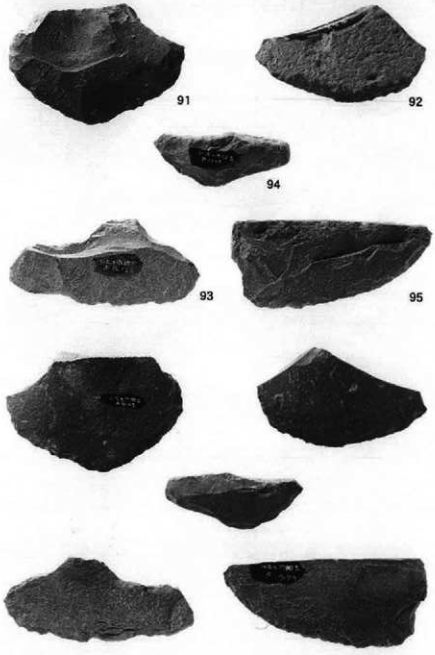
1. 打製石鏃①



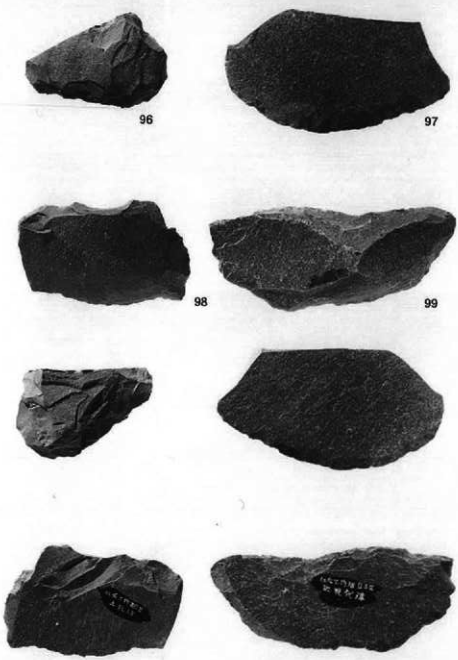
2. 打製石鏃②



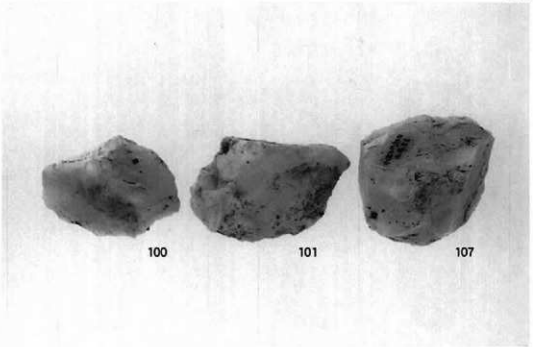
3. 打製石鏃③



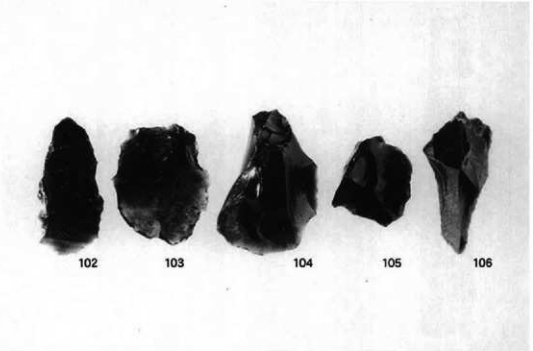
1. スクレイパー①



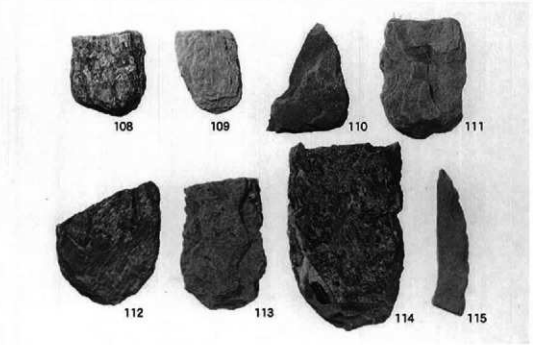
2. スクレイパー②



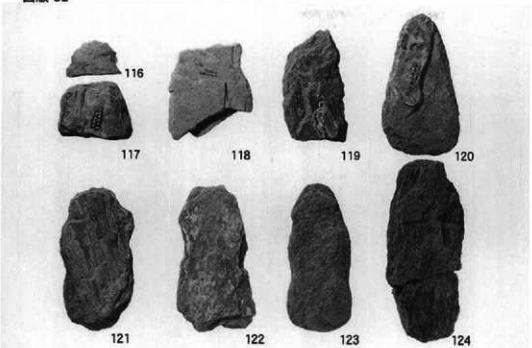
1. メノウ製スクレイパー、石核



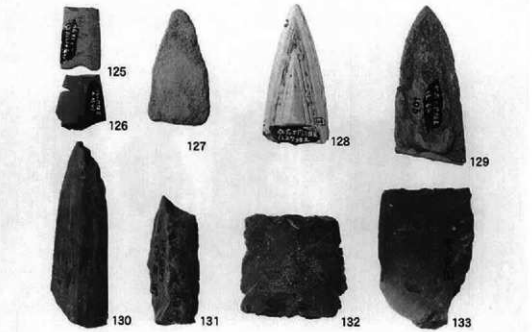
2. 使用痕ある剥片



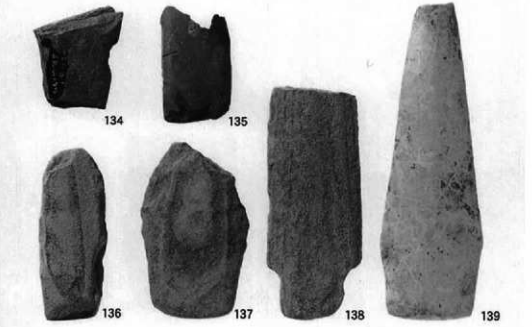
3. 打製石斧①



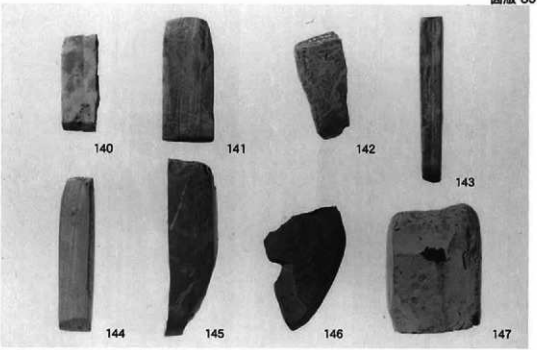
1. 打製石斧②



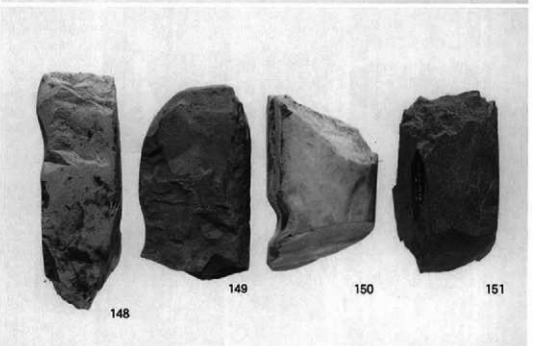
2. 磨製石鏃、磨製石剣



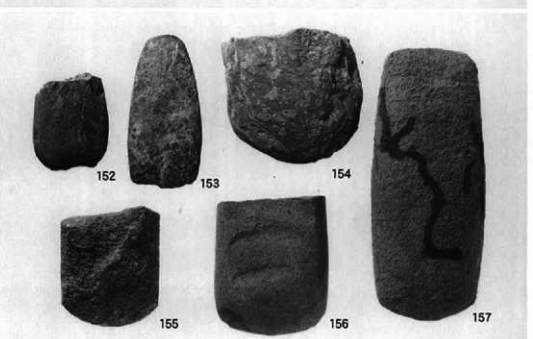
3. 磨製石剣



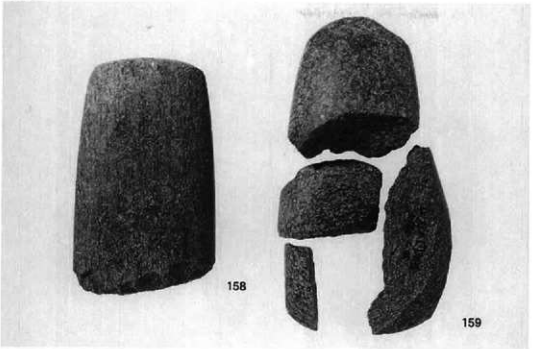
1. 片刃石斧①



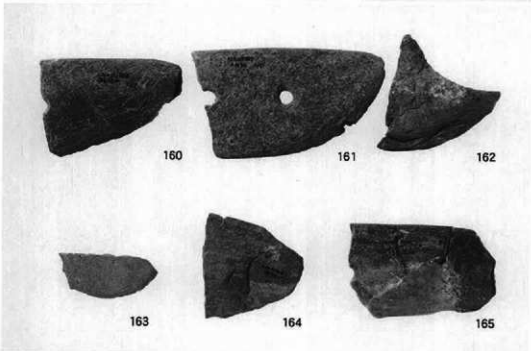
2. 片刃石斧②



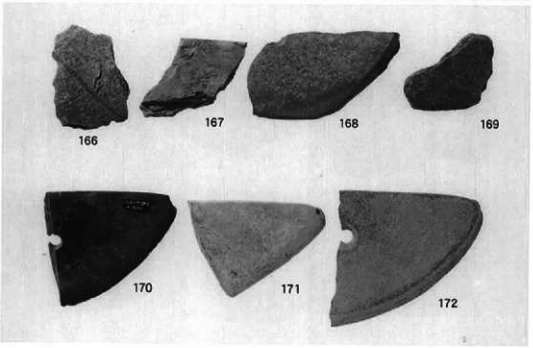
3. 磨製石斧①



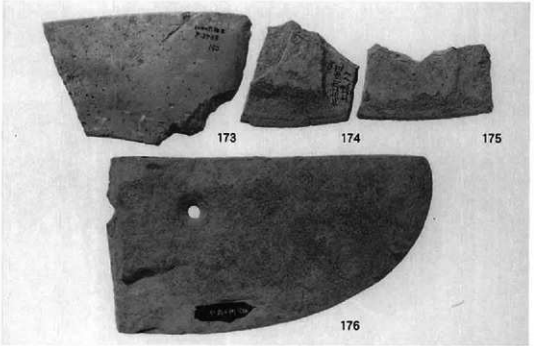
1. 磨製石斧②



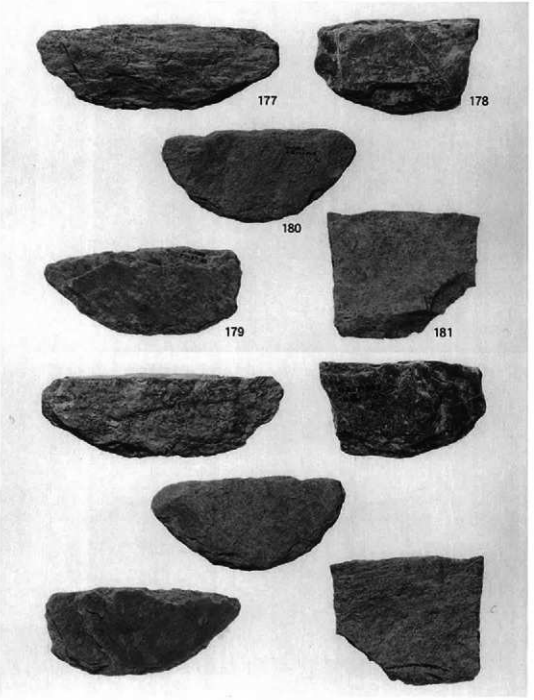
2. 石包丁①



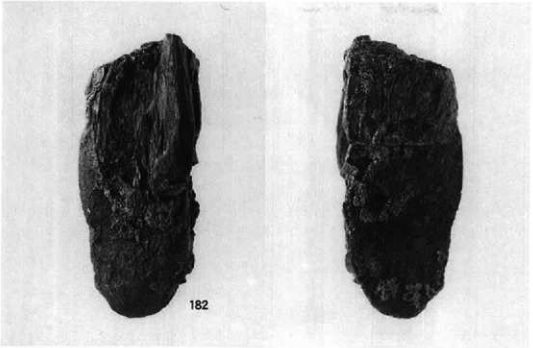
3. 石包丁②



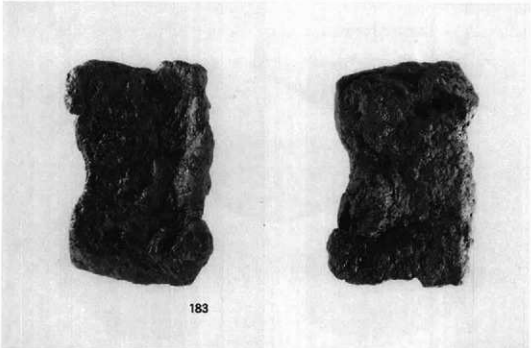
1. 石包丁③



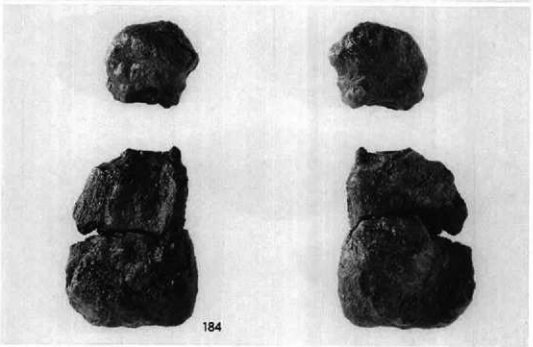
2. 石包丁未製品



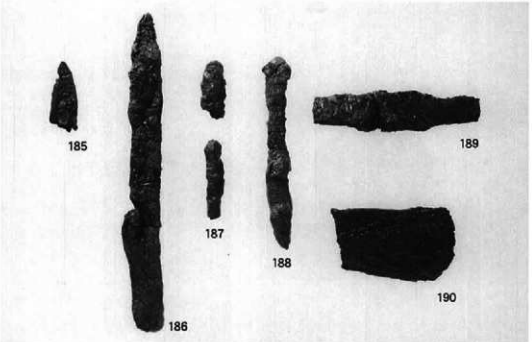
1. 鉄斧①



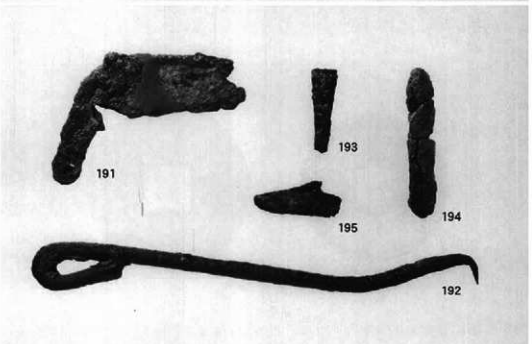
2. 鉄斧②



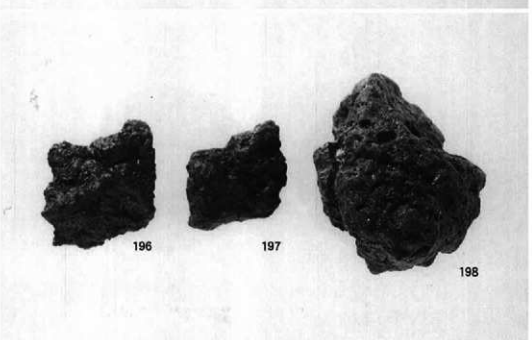
3. 鉄斧③



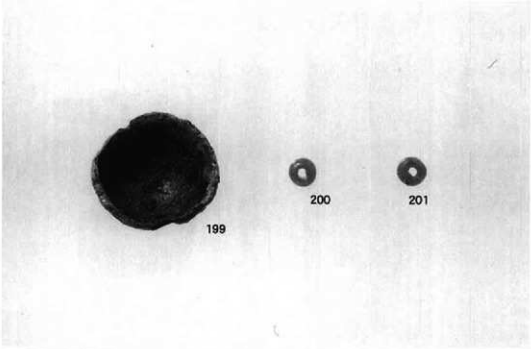
1. 鉄器①



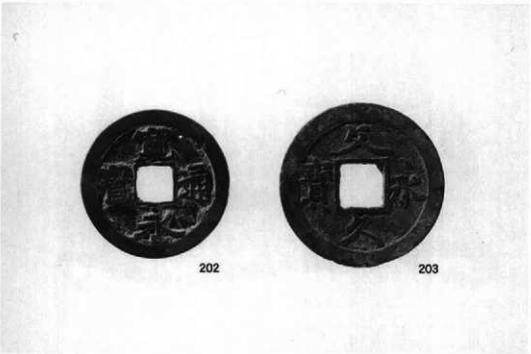
2. 鉄器②

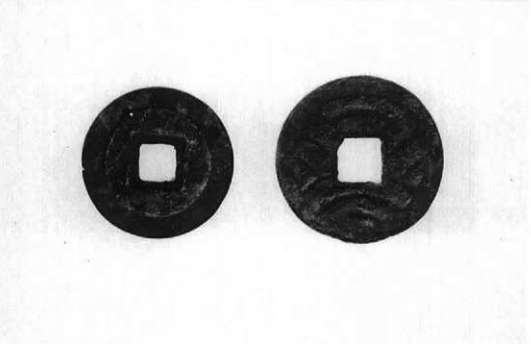


3. 鉄滓



1. 銅製品、ガラス製小玉





2. 古銭

報告書抄録

ふりがな	にえもんばたけいせき
書　名	仁右衛門畑遺跡Ⅱ
副書名	福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査
巻　次	Ⅱ（弥生時代編）
シリーズ名	一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第14集
編著者名	吉田東明
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812－8675　福岡市博多区東公園７番７号
発行年月日	西暦2001年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にえもんばたけいせき 仁右衛門畑遺跡	ふくおかけんうきはぐんよしいまち 福岡県浮羽郡吉井町 あざしんじ 大字新治字にえもんばたけ ・がくこう 学校窩	40481	630095	33° 20′ 41″	130° 45′ 19″	1995.4.10 ～ 1996.3.10 ～ 1996.4.11 ～ 1996.6.3 1997.2.10 ～ 1997.3.25 1997.4.23 ～ 1997.5.28	8,115㎡	道路建設（一般国道210号浮羽バイパス建設）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仁右衛門畑遺跡	集落 墓	弥生時代	竪穴住居跡 土坑 溝 甕棺墓 ピット	弥生土器 石　器 鉄　器	

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 12	登録番号 9

一般国道
210号線

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第14集

仁右衛門畑遺跡Ⅱ

平成13年３月30日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印　刷　福博綜合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕３丁目16番36号

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第14集

仁右衛門畑遺跡 II

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

—弥生時代編—

付　図

付図　仁石南門原遺跡遺構配置図(1/200)